ISSN　2187-638X

静岡英和学院大学

キリスト教研究年報

第五号

2017 年 3 月

静岡英和学院大学　キリスト教研究会

キリスト教研究年報　二〇一七年三月

静岡英和学院大学　キリスト教研究会

キリスト教研究年報　第五号

特集：キリスト教と学び

目　次

第五号発行によせて……静岡英和学院大学学長　柴田　　敏

世界文化遺産候補「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の
構成資産と観光受け入れ体制・観光商品化の現状
―長崎市と五島地域を中心に―……人間社会学科　崔　　瑛　1

宗教改革者ブーゲンハーゲンがヨナ書から学んだこと
－ブーゲンハーゲンがマルティン・ルターの『ヨナ書』から学び、さらに発展させた「ヨナ書」理解－
……人間社会学科　伊勢田奈緒　11

礼拝を通しての学び－　一年生全員からのアンケートを通して－（研究ノート）……　27
人間社会学科　　伊勢田奈緒、崔瑛、金承子
コミュニティ福祉学科　中原陽三、山田美代子

インタビュー　柴田敏学長・院長の思い……聞き手　伊勢田奈緒　39

2016 年度のチャペルとキリスト教行事の報告　……　43

2015 年度職員研修会におけるレジュメ　……前静岡英和学院大学学長・院長　武藤　元昭　44

執筆要綱……　46

編集後記……　47

第５号発行によせて

学 長 柴 田　　敏

『キリスト教年報』第５号の発行にあたりまして、就任１年目の学長として、巻頭のご挨拶を申し上げます。

キリスト教は、もとより本学の存立の基盤であります。そしてキリスト教の基盤は、「愛」であります。学院聖句、大学聖句、そして建学の精神、すべてに「愛」という一文字が入っているのは、キリスト教の「愛」、それはつまりイエス・キリストの「愛」、それがなければ、そもそも静岡英和学院大学・静岡英和学院大学短期大学部は、この世に存在しないのだということであります。

そして、人間はその「愛」を、学ばねばなりません。「愛」は、生まれつき人間に備わった徳性ではないからです。人間はイエス・キリストによって「愛」を学びました。そして今でも、これからも、聖書を読み、説教を聞き、神様の御心を求めて、学んでいかなければならないのであります。そういう意味から、今回のテーマ「キリスト教と学び」は、まことに重要な視点であるということができるでしょう。

今の世界は、大変不安定な状態にあるように思えますが、そのような状態を創り出している原因は、人間にほかなりません。人間が自分から世界をかき乱し、悩み、もがいているのですから、まことに困った話であります。しかしその人間を、神様は決してお見捨てにはならない。愚かな人間の歩みの中に、どこかで神の「愛」が実現し、私たちを最悪の状態から救ってくださる。そんなことは絵空事、妄想だという人がいるかもしれません。しかし、では「愛」以外に、何が人間を救うのでしょう。「権力」や「金」でないことは、すでに明らかではないでしょうか。人と人をつなぐ力、それは「愛」なのであります。All you need is love. その「愛」の学びは、終わることがないのであります。

最後に宗教主任の伊勢田奈緒先生をはじめ、ご寄稿、ご協力いただいた先生方、『キリスト教年報』第５号の発行にご尽力いただいたすべての方に、心よりお礼申し上げます。

世界文化遺産候補「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産と観光受け入れ体制・観光商品化の現状
－長崎市と五島地域を中心に－

崔　　瑛

1．はじめに

2016年の世界遺産登録を目指していた「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は，政府の推薦取り下げを受け，ストーリーや構成資産の範囲•対象等の推薦内容を見直した上で，「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」という新名称で2018年の登録を目指している．

当初「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は，16世紀におけるキリスト教の伝播と普及，禁教令以降のキリスト教徒への迫害と潜伏時代，明治以降の復活という長崎地方における日本キリスト教の歴史を象徴する14の資産で構成されていた．しかし，ユネスコ世界文化遺産の諮問機関であるICOMOS（イコモス）から内容の変更に関する勧告を受けたことが正式な推薦を見送り，申請内容の見直しに至った理由である．主な指摘内容は，既に類似内容の世界遺産が複数存在している点，禁教・潜伏期の状況や時代にこそ日本特有の歴史・文化的価値が著しい点であった．長崎県は，世界遺産としての明確な価値の証明を図るため，イコモスと推薦内容に関するアドバイザリー契約を締結しており，専門家会議等の開催による助言を得ながら，2017年2月を目処に内容の見直しを進めている．

長崎のキリスト教関連遺産の世界遺産登録に向けて，地域側は10年以上の準備期間をかけてきたが，世界遺産に登録される内容が見直されることで，構成資産の位置づけと地理的範囲等に変化が生じた．従って，観光受け入れの仕方も見直しが必要となっている．各自治体をはじめ，観光関連団体・企業等の関係機関は，変更に伴う対応を求められている．

本稿では，上記の背景を受け，2015年3月に実施した先行研究[1]に引き続き，世界遺産となるストーリーと構成資産の位置づけ，内容の変更面に焦点を当てながら，現地関係者に対するインタビュー調査や構成資産の現地視察を行った．

調査結果をもとに，①世界遺産構成資産候補の現状，②観光受け入れ体制および観光商品化の現状把握を行った．

本稿は，構成資産候補全12の中で，6つが位置する長崎市と五島地域（五島市，新上五島町，小値賀町野崎島）を調査対象に絞った．五島地域は，長崎市から高速船を利用し一時間程で移動可能であるため，長崎市と五島地域を1つの観光圏として捉えた．インタビューは，2017年1月6日から1月11日にかけて，NPO法人長崎巡礼センター，長崎県文化観光物産局世界遺産登録推進室，新上五島町職員（観光振興班，新上五島町教育委員会文化財課），上五島ふるさとガイドの会及び五島自動車（株）関係者の協力を得て実施した．

2．世界文化遺産候補「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の概要

⑴　各構成資産の意味と位置づけの変更

長崎地方には，キリスト教関連歴史遺跡が数多く存在しており，世界遺産登録の推進に向けた構成資産選定は，各地に点在する教会を中心に検討されてきた．2015年時点で作成された旧推薦書では14の構成資産候補が選定され，キリスト教の布教・弾圧・潜伏・復帰の歴史が表現される構成となっていた．

しかし，新推薦書では，潜伏期にのみ主眼をおいて，潜伏キリシタンが育んだ文化的伝統に焦点を当てた上で全構成資産の意味と位置づけが見直された（表 1）.

旧推薦書からの大きな変更点は，日野江城跡と田平天主堂が構成資産候補リストから削除されたことである．潜伏時代と時期的に離れている点で，直接な関連性を証明しにくいとの判断によるものである．現在 12 の構成資産候補が設定されている.

また，旧推薦書において，信仰の自由が齎された喜びを表す象徴とされていた複数の教会堂は，禁教令の撤廃による潜伏時代の終結の象徴として位置づけが変更された．このような変化に伴い，教会堂建築から潜伏キリシタン集落のなかで形成された文化的伝統や当時の生き様に注目するようになり，構成資産の価値を証明する内容や表現を見直す必要が浮上したのである．また，大浦天主堂と関連施設は，潜伏キリシタンの信仰告白の場所とされ，潜伏信仰が新たな局面を迎える契機となった場所として位置づけられた.

⑵　世界遺産構成資産候補と地域の現状

1）長崎市の現状

長崎市内には，大浦天主堂，外海の 2 カ所（出津集落，小野集落）で合計 3 つの構成資産候補がある．また，世界遺産の構成資産には含まれないが，長崎のキリシタン歴史上，重要な意味のあるカトリック浦上教会(以下，浦上天主堂）がある.

〈1〉　大浦天主堂と周辺地域

・大浦天主堂の歴史と現在

2015 年に 150 年周年を迎えた国宝大浦天主堂は，フランス出身神父，宣教師らが建設に関わり，当時は「ふらんす寺」と呼ばれた．大浦天主堂は，1597 年に殉教した二十六聖人を保護者として仰ぐため，殉教地で建てることが望まれたが，フランス人専用施設とし

表 1　構成資産候補の見直し内容

<table>
<tr><th colspan="2">構成資産の名称の変更</th><th colspan="3">構成資産の意味と位置づけの変更</th></tr>
<tr><th>名称（旧）</th><th>名称の変更（新）</th><th>旧推薦書の内容</th><th colspan="2">新推薦書での変更内容</th></tr>
<tr><td>日野江城跡</td><td>※削除</td><td>布教の拠点</td><td colspan="2">潜伏時代との直接な関連性の乏しさを理由に削除された</td></tr>
<tr><td>原城跡</td><td>変更なし</td><td>弾圧（島原・天草）</td><td colspan="2">–</td></tr>
<tr><td>平戸の聖地と集落
（春日集落と安満岳）</td><td>変更なし</td><td>山岳寺院の拠点
潜伏集落</td><td rowspan="7">禁教期に固有信仰形態が育まれた集落
※教会堂は潜伏時代の終了を象徴するもの</td><td rowspan="5">16 世紀からの信仰形態が形成された集落</td></tr>
<tr><td>平戸の聖地と集落
（中江ノ島）</td><td>変更なし</td><td>殉教地</td></tr>
<tr><td>天草の崎津集落</td><td>変更なし</td><td>潜伏集落</td></tr>
<tr><td>出津教会堂と関連施設</td><td>外海の出津集落</td><td rowspan="2">カトリックへの復帰（信仰の復活）を象徴する教会堂</td></tr>
<tr><td>小野天主堂</td><td>外海の小野集落</td></tr>
<tr><td>野崎島の野首・舟森集落跡</td><td>野崎島の集落跡</td><td>潜伏集落</td><td rowspan="5">離島等への開拓移住による集落</td></tr>
<tr><td>旧五輪教会堂</td><td>久賀島の集落</td><td rowspan="4">カトリックへの復帰（信仰の復活）を象徴する教会堂</td></tr>
<tr><td>黒島天主堂</td><td>黒島の集落</td></tr>
<tr><td>江上天主堂</td><td>奈留島の江上集落</td></tr>
<tr><td>頭ヶ島天主堂</td><td>頭ヶ島の集落</td></tr>
<tr><td>大浦天主堂と関連施設</td><td>大浦天主堂</td><td>信徒発見の場所</td><td colspan="2">信徒発見の場所（潜伏キリシタンの信仰告白の場所）</td></tr>
<tr><td>田平天主堂</td><td>※削除</td><td>カトリックへの復帰（信仰の復活）を象徴する教会堂</td><td colspan="2">禁教期以降形成された集落
禁教期との関連性の立証が難しいという理由で削除された</td></tr>
</table>

て建設が許可され，居留地以外での建設は認められなかった．居留地に隣接する南山で1863年から本格的に教会堂の建設がはじまった[2)]．

大浦天主堂の天井様式は，リブ・ボールト天井（こうもり天井）であり，表面を漆喰で塗り上げた，黒地に白い格子のナマコ壁が特徴である．大浦天主堂の建築様式は，その後，長崎の各地方で建てられた多くの教会建築に影響を与えた．

一方で，大浦天主堂は，長い禁教時代をくぐり抜いた信徒による信仰告白（信徒発見）の場所という位置づけで，世界遺産の構成資産の中でも新たな局面を迎える象徴的意味合いのある場所である．大浦天主堂の献堂式は1865年2月19日行われ，その一ヶ月後の3月17日にプティジャン神父の下へ約15名の信徒が訪れ信仰を告白した．「信徒発見」と言われるこの出来事は，約250年にわたった禁教時代のなか，密かに信仰を守ってきた潜伏キリシタンらが信仰の自由を求め行動する契機になるが，キリシタンに対する検挙や迫害につながる結果を招く．

欧米各国から信教に対する抑圧に対する批判を受け，キリスト教の禁制が解けた1874年の翌年，日本の神学生育成のために建てられた羅典神学校は，大浦天主堂のすぐ側にある関連施設である．ド・ロ神父の設計によって校舎が建設され，1882年には，教育を受けた日本人神父が誕生した．現在は，キリシタン資料館として利用されている．

キリシタン資料館は，禁教時代の潜伏キリシタンの生活様子を表す資料（踏み絵，マリア観音）の展示場所であり，観覧者に対する潜伏キリシタンおよびキリスト教関連歴史の情報提供の機能をしている．大浦天主堂とともに，カトリック関連遺跡として団体ツアー客等の観光客の自由な出入りが可能な施設として運営されている．

・周辺地域の観光関連事情

長崎市内には，既に2015年に世界遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」の8つの構成資産（三菱重工業株式会社関連遺産，端島炭坑や旧グラバー邸等）がある．大浦天主堂の周辺（徒歩で移動可能距離内）に旧グラバー邸があり，このエリアは，価値の高い観光スポットが集中するため，早くから長崎の歴史文化観光の拠点となっている．世界遺産登録による観光需要に対応するために，近隣の史跡，宿泊施設の整備も進められている（旧長崎英国領事館，ANAクラウンプラザホテル等）．端島（通称，軍艦島）ツアー商品を販売する「軍艦島コンシェルジュ」が運営する軍艦島デジタルミュジアムも近隣に新設された．今後の観光客増加を見据えたハードウェアの補修・整備が進められている．

・近隣のキリシタン歴史関連資料館

その他，キリシタン関連資料が展示される長崎市内の施設として，二十六聖人記念館，長崎歴史文化博物館等がある．カトリックの聖地とされる日本二十六聖人殉教地西坂の丘にある二十六聖人記念館には，日本におけるキリスト教の布教から弾圧，信仰復活までの歴史を示すキリシタン関連資料が数多くある．また，長崎歴史文化博物館には，江戸時代のキリシタン取り締まりや弾圧の模様を理解できる詳細な資料が展示されている．いずれも大浦天主堂のある長崎中心部から路面電車や徒歩での移動が可能な距離にあり，長崎のカトリックおよび潜伏キリシタンに関する歴史を理解するための豊富な資料が備わっている．

〈2〉外海の集落

・集落の歴史，教会堂と関連施設

外海地域には，出津教会と旧出津救助院，小野教会をはじめ，ド・ロ神父記念館，ド・ロ神父の墓，バスチャン屋敷跡等が点在する．出津と小野の2つの集落が世界遺産の構成資産候補となっている．

多くの潜伏キリシタンが住んでいた外海地域は，禁教期に小規模な潜伏キリシタンの信仰組織が連携し，聖画や教養書，教会暦などを密かに伝承した[3)]．また，自らの信仰を守るために，神社で密かに信仰対象を祀り，オラショを唱えるなどの形で，在来の宗教と信

仰の場を共有してきた独特な儀礼形式が長年にわたり形成された．

解禁後は，段階的にカトリックへ復帰し，1882年に集落の高台に教会堂を建てた（出津教会）．1893年には，禁教期に信仰の場としていた神社の近くにも教会堂が建てられた（小野教会）．いずれの教会堂も質素な佇まいであり，特に，ド・ロ壁といわれる小野丘玄武岩の石積み等の地域的特徴は小野教会の建築様式に表れている[4]．

一方で，当地域には，禁教期から続けてきた信仰形態を変えることを拒み，カトリックに復帰しなかったかくれキリシタンの集落も存在する．

・ド・ロ神父にまつわる施設とストーリー

「ド・ロさま」として親しまれるド・ロ神父は，1879年に外海地方に赴任し，教会堂の設計や建設費の工面を担った．信徒らは教会堂建設のためにド・ロ神父の指導のもとで労働力を奉仕した．また，ド・ロ神父は，貧しかった地域民の生活質向上のために，私財を投じた救助院等の福祉施設の建設・運営，農業・漁業の指導，医療事業と教育事業に取り組んだ．パン，マカロニ，そうめん，醤油などの生産・販売が行われ，信徒らの自立に向けた経済活動を支援した．

現在は，地域の歴史と文化を語る上で重要な文化財として，旧出津救助院，ド・ロ神父記念館が保存・活用されている．

・外海までのアクセスと多様な連携可能性

長崎市の中心地から外海までは，バスで約1時間半が所用され，バス停から徒歩20分ほどの距離の所に教会堂と関連施設が位置する．

長崎市内中心地と外海地域の構成資産は一日で周遊できる圏内にあり，連携による観光プログラムの多様化が可能である．また，長崎市内の他の魅力的な観光資源との組み合わせによる観光客の周遊を促すための取組みやコンテンツ作成への選択の幅も広いといえる．

〈3〉浦上天主堂と周辺地域

・浦上天主堂の歴史

第2次世界大戦時，原爆の被害を受けた浦上地区は，長崎市の北部に位置するキリスト教人口の多い地域である．

1865年の大浦天主堂での信徒発見以降，最後のキリシタンへの厳しい迫害となる「浦上四番崩れ」というキリシタンへの弾圧事件があり，浦上の信徒達はこれを「旅」と称したという．1873年に行われた禁教令の撤廃により，流刑から帰還した信徒らは，教会堂の建設に取りかかった．かつて踏み絵が行われた土地を買収（1880年）し，煉瓦造りの浦上天主堂が着工（1895年）された．長い歳月をかけ，1915年にようやく献堂式を迎えたが，その20年後に，原子爆弾によって天主堂を含む周辺地域は甚大な被害を受けた[5]．その後，1959年に再建され現在に至っている．現在，堂内の一角には原爆による被害を物語る資料が展示されている．浦上のキリシタンの苦難の歴史の象徴として，平和への祈りを捧げる場所となっている．

・浦上キリシタン資料館

2014年には，長崎市平和町の浦上天主堂から徒歩数分圏内に，長崎大司教区と信者有志の協力による資料館が開設された．

写真1　浦上キリシタン資料館の外観

浦上の潜伏キリシタンの歴史，浦上四番崩れ，原爆の被害等に関する資料，パネル等が展示されている．展示スペースは広くないが，「津和野に流された浦上キリシタン」等の浦上のキリシタンをテーマとする特別展示等の

企画が行われ，浦上におけるキリシタン歴史に特化した資料館となっている．

浦上エリアには，浦上天主堂と浦上キリシタン資料館以外に，平和公園，原爆資料館等があり，キリシタン関連歴史の他，平和へのメッセージ性の強いコンテンツが多いエリアといえる．

2）五島地域の現状

ここでは，五島地域の世界遺産構成資産候補の現状について概観する．五島地域は九州の最西端に位置し，129 の島からなり，五島市（福江島,奈留島,久賀島),新上五島町（中通島，若松島），中通島周辺の小値賀島，宇久島に区分できる．五島列島全域に計 50 以上の教会堂がある．険しい地形等による島内移動の難しい環境的背景があり，集落ごとの教会建設が必要であったと考えられる．

五島市の久賀島と奈留島，新上五島町中通島の頭ヶ島，小値賀町の野崎島の計 4 箇所に構成資産候補があり，そのうち中通島とつながる頭ヶ島以外の 3 カ所が二次離島である．五島地域は，構成資産となる集落が離れており，離島に点在するため，船による移動に伴うアクセスの不便さが大きな課題となっている．

〈1〉五島市

五島市には，久賀島の「久賀島の集落」と奈留島の「奈留島の江上集落」が構成資産候補となっており，それぞれの集落内に旧五輪教会堂と江上天主堂がある．

・久賀島の概要

久賀島は，福江港から北東に約 2 ㎞離れており，定期船や海上タクシーの利用により上陸ができる．島内ではタクシーかレンタカー等での移動が可能である．島の面積は約 37.35 ㎢，住民は約 200 名であり島全域が国指定重要文化的景観になっている．

・久賀島の集落と旧五輪教会堂

久賀島の集落は，禁教期に外海から移住した潜伏キリシタンが，仏教集落との互助関係を築きながら組織的に信仰を守り続けた歴史がある．久賀島の集落の海辺に旧五輪教会堂が残っており，すぐ近くには，現在教会の機能を果たしている五輪教会がある．旧五輪教会堂は 1881 年に建てられ，現存する長崎の教会堂のなかで，大浦天主堂に次いで古く，老朽化や建て替えを理由に，何度か取り壊しの危機があった．しかし，地元住民有志の努力によって価値が認められ，残されてきた．福江市の維持管理のもと国指定重要文化財の指定を受け，現在に至っている．

旧五輪教会堂は，建設当時，浜脇教会堂として建てられたが，1931 年の浜脇教会の建

写真 2　海上から眺める旧五輪教会堂（左）と五輪教会（右）（著者撮影）

写真 3　旧五輪教会堂の内部（著者撮影）

て替えの際に，五輪地区住民らの要請によって現在の場所に移築された[6]．リブ・ボールト天井は大浦天主堂の影響を受けたとされる．日本初期教会建築を代表するものであり，木造の素朴な造りとなっている．

・奈留島と江上天主堂

久賀島と上五島の若松島の間にある奈留島は，面積が約 23.82 ㎢であり福江港からフェリーでの移動が可能である．かつての奈留島では，潜伏時代の信仰を続けるかくれキリシタン人口が多かったが，江戸末期に外海から移住した潜伏キリシタンの子孫がカトリックに復帰し，1906 年に現在地に簡素な教会堂を建てたのが江上天主堂の前身である．

江上天主堂は，長崎の各地で教会建設に関わっていた鉄川与助が設計しており，信徒らはキビナゴ漁で得た資金を建築費にあて，労働奉仕を行った．1918 年 3 月に完成され，小規模ではあるが，大正時代の木造教会のなかでも完成度の高いものとされる．2002 年に県指定の有形文化財に，2008 年に国指定重要文化財となった．ロマネスク様式の天主堂であり，湿気から守るための高床式構造，淡いクリーム色の壁に水色の窓枠の外観，手描きの木目模様の柱，手描きの花模様の窓ガラスが特徴的である．2017 年 1 月現在は，教会堂の保存・補修工事が行われている．

・福江島の交通事情とキリシタン関連施設

福江島には，世界遺産構成資産は存在しないが，五島バス（株）等の島内交通機関が運営する定期観光バス，路線バスでの移動が可能で，他の島に比べ公共交通の利用が便利である．久賀島や奈留島への移動拠点であり，堂内にキリシタン資料館がある堂崎天主堂（県指定文化財），五島観光歴史資料館等，キリシタン関連資料・図書等の閲覧ができる施設も備わっている．

〈2〉新上五島町の頭ヶ島集落

新上五島町には，1878 年に建てられた青紗ヶ浦教会をはじめ，1975 年建立された青方教会等，計 29 の教会堂があり，そのなかで頭ヶ島天主堂が世界遺産の構成遺産候補となっている．

頭ヶ島は，幕末までは無人島だったが，1859 年，鯛ノ浦（中通島）からの移住があり，そのほとんどがキリシタンへの迫害から逃れるカトリック教徒であった．頭ヶ島天主堂は，その移住民の子孫によって建立された．1887 年に木造教会が建てられ，10 年の歳月をかけ 1919 年に石造の天主堂が完成された．建築材として頭ヶ島一帯で採石される砂岩切石（五島石）が用いられ[7]，地域の石工技術が教会建築にも活かされた．全国的にも珍しい石造構造教会となっており，石切場と石造物は，地域の歴史と文化が現れた景観として国重要文化的景観にも選定されている．

〈3〉野崎島における野崎の集落跡

野崎島は，1971 年の集団移住等により，現在無人島化している．現在は，小値賀町のおぢかアイランドツーリズム協会の野崎島自然学塾村が旧野首教会堂の管理を担当している．事前連絡の必要があり，小値賀から町営船を利用できる．

3．観光受け入れ体制の現状

最後に，長崎市と五島地域における観光受け入れ体制と観光商品化の現状をまとめる．観光受け入れ体制については，1）関連 NPO の活動状況，2）教会守の設置，3）観光客及び近隣住民の利便性増進に向けた取組みを中心にまとめる．観光商品化の状況は，観光施設・コンテンツ，地域特産のブランド化，ツアー商品について，現在の取組みを把握した．

1）関連 NPO の活動状況

〈1〉巡礼センター

NPO 法人巡礼センターは，長崎，外海，上五島に事務所があり，その活動は，巡礼ツアー等の受入（巡礼客に対する巡礼コースの提案等），巡礼ガイドの養成と派遣・紹介に特化されている．ガイド養成講座を開催しながら，ガイドの学習仕組みの構築，巡礼関連のコンテンツ開発にも力を入れている．

〈2〉長崎の協会インフォメーションセンター

長崎の教会インフォメーションセンターは，構成資産候補となる教会に訪問を希望する人々から，事前連絡等を受け付け，教会に伝える役割,教会訪問時のマナーの啓発の他,訪問者の質問等に対応する窓口である.また,世界遺産のストーリー，歴史，関連知識に対する一般の理解を促す冊子や資料の作成，販売も行っている.

2）教会守の設置

世界遺産構成資産の全教会に，教会運営や宗教関連知識と理解のある担い手として教会守が設置されている．教会守として，各地域の信者が教会付近に常駐し，訪問者の把握や質問への対応，説明等の役割を担っている．現在，構成資産に含まれる９つの教会のある自治体は,各自治体の予算で教会守を雇用し,来訪者の集計や教会の管理を行っている.

3）観光客および近隣住民の利便性増進に向けた取組み

〈1〉新上五島町の取組み

・パーク＆ライドサービス

頭ヶ島集落の天主堂周辺には，駐車スペースが限られており，路上駐車等による交通事故やトラブルの危険があることから，1981年開設された上五島空港の空間を活用したパーク＆ライド方式（空港からシャトルバスによる送迎）による車両の乗り入れ制限を行っている.

・エアサイネージ

インターネット回線につながらなくても,サービス利用者に必要なコンテンツをスマートフォン等に配信プッシュできるプラットフォームを運用し，４ヶ国語によるナレーションで教会の映像と情報コンテンツを提供している.

〈2〉教会巡りハンドブック等の作成

巡礼地図，モデルコースの提示，日本語以外の，外国人向けの多言語対応のガイドブック・パンフレットの作成等が行われている.

4）地元ガイドの活動

地域のボランティアガイド組織の活動については，長崎市では「長崎さるく」があり,五島地域では，地域住民によるガイド組織である「ふるさとガイドの会」が創設され，まちの案内役を担っている.

5）案内看板と道路標識等の設置

構成資産の位置が分かるような総合案内看板，構成資産の内容を紹介する案内看板，道路標識の整備が行われている.

6）その他

今後，世界遺産の情報発信の拠点として,世界遺産センターが設置され，各地域に世界遺産センターのサテライトを設置する予定である.

４．観光商品化の現状

長崎市外海地域と五島地域における観光商品化の現状を以下に整理する.

1）長崎市外海の観光商品化の現状

外海地域には，観光客の地域に対する理解を促す体験メニューが備わりつつある．旧出津救助院が主催するド・ロ神父にまつわる体験として，畑での栽培体験，作物を用いた料理体験がある．また，コンサートや公演が観覧できるように関連施設が運営されている.

周辺には，潜伏キリシタンをテーマにした小説「沈黙」の作者である遠藤周作の文学館があり潜伏キリシタンの歴史と生活に関するコンテンツに触れられる一つの観光体験の拠点も備わっている.

一方で，ド・ロ神父をモチーフとする関連商品（ド・ロさまそうめん，うどん，パスタ等）が出津農産加工生産組合等で開発され,固有の文化的伝統の商品化による地域の収益向上が図られている．関連商品は，旧出津救助院とド・ロ神父記念館でも購入できる.

2）五島地域の観光商品化の現状

島間・島内の移動の利便性向上を図るためのクルーズ商品が地元の観光会社，観光協会によって企画・販売されている．

〈1〉現行のクルーズ商品

久賀島と奈留島等の二次離島へのアクセス改善を図り，上五島と下五島間の移動・周遊を促す目的で五島市と新上五島町を行き来するクルーズ商品が販売されている．長崎県と五島市，新上五島町の補助を受け五島自動車（株）が運営する「五島列島キリシタンクルーズ」と，五島市，新上五島町の観光協会，おぢかアイランドツーリズム協会が企画・販売する「五島列島キリシタン物語」の 2 種類がある．

〈2〉五島列島キリシタンクルーズの現状

2014 年から運営をはじめ，上五島発コースと福江発コースの 2 種類がある．構成資産候補の旧五輪教会堂と江上天主堂，船でしかアクセスできないキリシタン洞窟[注1)]を訪れる．上五島発コースは福江港下船，福江発コースは若松港下船となっており，乗下船場所が異なる仕組みである．クルーズ商品は，海上タクシー，島内移動用タクシー，案内担当の地元出身巡礼ガイド等で構成されるため，本来であれば，最小催行人員を 10 名以上に設定する必要があるが，現行は 2 名に設定し運営している．過去に比べ利用者は増加傾向にあり，9 ～ 11 月のピーク時は毎週末運行が可能だが，利用客が減少する時期の不足分は自治体の補助金で補う状況である．

〈3〉五島列島キリシタン物語の商品特徴

小値賀島・野崎島編，上五島編，久賀島・奈留島編の 3 種類があり，10 月から 3 月まで毎週木～土曜あるいは日曜に運行される．それぞれの地域の世界遺産構成資産候補の教会堂と集落（小値賀島：旧野首教会・野崎集落跡，新上五島町：頭ヶ島天主堂，五島市：旧五輪教会堂・江上天主堂）を訪問できる内容であり，その他，関連施設（歴史資料館，鉄川与助居宅）訪問，散策，観光体験（木工品づくり）等が盛り込まれている．各観光協会が商品の企画・運営を担当し，五島列島キリシタンクルーズと同様に，最小催行人員は 2 名となっている．

4．おわりに

1）長崎市内の現状

長崎市内には，世界遺産構成資産候補である大浦天主堂を中心に，潜伏キリシタン関連の歴史資料館が多く，世界遺産の意義に対する理解を深める展示物が充実している．また，潜伏キリシタンの集落が残る外海地域が市内にあり，五島地域との連携・送客も可能である．キリシタンをテーマとする世界遺産観光と巡礼の拠点として，観光商品とコンテンツの多様化が可能である．市内に，明治日本の産業革命遺産という特徴の異なる世界遺産構成資産群が点在しており，組み合わせができる素材も充実している．

2）五島地域の現状

構成資産が離島に位置するため，アクセスの不便さが課題となっているが，五島地域特有の歴史，海と自然環境，地域特産等の資源との組み合わせ，島の住民との交流等の面で，観光振興には多様な可能性がある．

3）観光受入体制及び観光商品化

NPO 組織との連携による来訪客のマネジメントや教会守の設置，その他，来訪客の利便性増進のための試みが行われている．長崎市と五島地域は，地域現状に合わせた観光商品化を進めている．今後は，来訪客の動線，観光行動に対する調査等を取り入れ，観光客のニーズに寄り添う観光商品づくりを徹底していくことも必要である．また，五島地域では，アクセス面の改善に向けたクルーズ商品が企画・販売されており，今後，世界遺産及び観光商品に関する情報発信による集客力の強化等が期待できる．

＜注＞

注 1）キリシタン洞窟は，若松港から船で約 10 分のところにある洞窟であり，明治の

キリシタン迫害の際，付近のカトリック信者が弾圧を逃れ，隠れ住んだといわれる場所である．

＜参考文献＞

1）崔瑛（2015）「長崎の教会群とキリスト教関連遺産の世界遺産登録と観光（特集キリスト教との出会い）」，静岡英和学院大学キリスト教研究年報（3），p.7-11
2）長崎の教会群インフォメーションセンター執筆，カトリック長崎大司教区監修，『大浦天主堂物語』
3）長崎県世界遺産登録推進課制作『世界遺産候補長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産パンフレット』
4）長崎市観光推進課制作『時の巡礼』
5）一般社団法人長崎観光連盟（2015）『エッセイ浦上物語』
6）長崎県文化観光国際部観光推進課（2016）『周辺散策マップ長崎の教会群とキリスト教関連遺産旧五輪教会堂』
7）木方十根，山田由香里（2016）『長崎の教会堂風景のなかの建築』
8）長崎巡礼協議会（2010）『外海のキリシタンとド・ロ神父』
9）片岡弥吉（2012）『長崎のキリシタン』聖母文庫
10）五島市世界遺産登録推進協議会（2012）『五島市教会巡りハンドブック』
11）山中寛（2016）『長崎巡礼祈りの道をゆく』まるちれす研究会
12）長崎文献社編（2007）『旅する長崎学6 キリシタン文化』長崎文献社
13）長崎文献社編（2016）『五島列島の全教会とグルメ旅』長崎文献社

宗教改革者ブーゲンハーゲンがヨナ書から学んだこと
－ブーゲンハーゲンがマルティン・ルターの『ヨナ書』から学び、発展させた「ヨナ書」理解－

伊勢田　奈　緒

はじめに

宗教改革者であるヨハンネス・ブーゲンハーゲン（Johannes Bugenhagen、1485 － 1558）の人生最大の危機の時代―それはルターが亡くなり、ルター派の指導的立場において苦しんだ時代―を救ったのがまさに聖書であり、そして、その中でも「ヨナ書」であったと考える。ドイツで起こった宗教改革運動は、運動の統一的指導者であったマルティン・ルターの死後、その方向性を見失ったように思われる。そして、当時、シュマルカルデン同盟[1]の盟主で最も強力なルター派支持者のひとりであるヘッセン方伯フィリップ（Philipp I,1504 － 1567）の重婚問題、ザクセン公モーリッツ（Moritz,1521 － 1553）の同盟脱会、そして続くカトリック信奉者である皇帝とプロテスタント側との対立からなるシュマルカルデン戦争勃発に至るめまぐるしく移り変わる国際情勢が宗教問題と絡まって宗教改革運動は疾風怒濤の中に投げ込まれていった。すなわち、改革運動は、最初の宗教改革者たちが目指していた神のことばに基づく純粋な宗教の改革運動とは異なり世俗的な、また暴力的な方向へと進んでいくことになった。故にメランヒトン[2]やブーゲンハーゲンたち福音主義の聖職者は、ただ純粋に信仰の問題、教会の問題に専念することはできず、さらに一段と政治的、そして国際的な利害関係、さらに福音主義の中での対立が加わり、非常に困難な状況の中で、もう一度、福音主義を指導していく立場である自分たちの使命を見直さなければ、前へ進めない事態に陥った。1547 年、前年から起こったシュマルカルデン戦争は同盟側の敗北となった。この時、常にルターの教説を信奉し、真の宗教のための正義の戦争として同盟を擁護していたブーゲンハーゲンが選んだ道は、モーリッツの要請に応え、アウグスブルク仮条約の採用を受け入れることであった。しかし、この彼のとった行動に対して、彼は裏切り者として、ヨハン・フリードリヒ伯選帝侯（Johann, Friedrich,1503 － 1554）、M. フラキウス・イリリクス（M.Flacius Illyricus,1520 － 75）をはじめ、かつてのルター派の友人たちの非難を浴びることになった。この一連の出来事によって彼は精神的に疲労困憊した。既出の

[1]「シュマルカルデン同盟」は 1531 年に結成され、主として、宗教問題、すなわち、神のことばの説教の自由、福音的教理とそれにかかわる教会的、信仰的な事柄の改革の自由を主張した。これに対して「反シュマルカルデン同盟」は、主として、ローマ・カトリック教会を支持する皇帝、領邦君主、選帝侯によって政治、経済、社会の諸問題の権利の保護を主張した。シュマルカルデン同盟はバイエルン、オーストリアなどの南ドイツ、フランケン、シュヴァーベンなど南西ドイツに広がり、さらにフランス、イングランド、デンマークまで拡大していった。やがて、中央ヨーロッパの国際同盟の色彩を強め、抗争はローマ・カトリック教会、同教会を支持する皇帝カール五世とハプスブルク家に対するシュマルカルデン同盟という構造となった。

[2] メランヒトン（Melanchton, Philipp1497 － 1560）は、チュービンゲン大学講師を経て、ヴィッテンベルク大学のギリシア語、神学教授となった。彼はここでルターと知り合い、ルターの宗教改革運動の最大の理論的協力者となって終生交友した。『神学綱要』で最初の組織的プロテスタント神学の基礎をおき、さらにその信仰告白を起草した。ルター没後、彼の後継者とされる。しかし、その立場は微妙でエラスムスやロイヒリンの聖書的人文主義と宗教改革の中間とも言われ、ローマ教会との共通の土台を設定しようと努め、改革派との間でも融和的で、正教会の指導者たちとも接触した。

拙者の論文[3]にあるように、その悲痛な心の内を彼の忠実な友人であるデンマーク王クリスチャン三世に書簡にしたためた。その時、その書簡に添えられたのが『ヨナ書注解』であった。彼はヨナ書に基づいて何が信仰において正しいか、自分のこれからの指針を求めようとし聖書の言葉と格闘した。ブーゲンハーゲンの当時の心情を知る上でも、また彼が、ルターの教説である信仰のみ、信仰義認を断固たる姿勢をもって牧会者として生きようとしたことを知る上でも、『ヨナ書講解』は重要な書であると考える。本稿では、この『ヨナ書講解』を彼が師と仰ぐマルティン・ルターの『ヨナ書講解』と比較しながら、ブーゲンハーゲンが、ヨナ書からいかに、自分自身を取り戻し、再び、自分の使命を見出すことを学び取っていったのかを考察したい。尚、先行研究については Martin J.Lohrmann, Bugenhagen's Jonah, Lutheran（Univ. Press, 2012）があり、ブーゲンハーゲンのヨナ書講解についての研究書であるが、本稿では、ルターのヨナ書講解を学んだブーゲンハーゲンがさらに彼独自のヨナ書解釈に至る過程について注目して研究した。

1.『ヨナ書講解』について

シュマルカルデン戦争は1547年4月ミュールベルクの戦いでザクセン選帝侯が捕らわれ、選帝侯位がモーリッツ公に渡され、同年9月、皇帝側が勝利したが、ヴィッテンベルク大学は同年10月から授業再開となった。ブーゲンハーゲンは、戦後、直ちに、今のヴィッテンベルクの現状を踏まえつつ、ヴィッテンベルク市の人々や学生たちに自分のこれまでの、そしてこれからのスタンスを理解してもらおうと、教会では説教を通して、また大学では聖書講義を通して、覚悟をもって語り始めた。そして、大学再開後、彼が選び、始めたのがヨナ書の講義であった[4]。そして、この講義をまとめたものが、1550年にヴィッテンベルクのクロイツアーから出版された。ブーゲンハーゲンはこの書において、ヨナ書の中のニネベの人々の悔い改めを通して、真のキリスト者の悔い改めについて述べ、また、教皇派に対して、信仰のみ、神の義を貫く彼の立場を示そうとしている。彼は序文で自分がヨナ書を選んだ理由をヨナ書の中に神の隠された知恵と真理を学べるからであるとしている[5]。ブーゲンハーゲンは、ルターと同様、聖書の人であり、人の生全体の中で、聖書の私信を、神から教えられる生きた声として、理解していた。ヨナ書はテキストとしては短いものであるが、彼は聖書全巻の中心となる流れの中から、ヨナ書を読んだと考えられる。たとえば、イエスがヨナを挙げてヨナのしるしを言及した、新約聖書マタイによる福音書12章38～41節「すると、何人かの律法学者とファリサイ派の人々がイエスに『先生、しるしを見せてください』と言った。イエスはお答えになった。『よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがるが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中にいることになる。ニネベの人たちは裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。ニネベの人々はヨナの説教を聞いて悔いあらためたからである。ここに、ヨナにまさるものがある。』を挙げたり、ルカによる福音書11章29～30節のヨナがニネベの人々のしるしになったように、イエスが今の人々のしるしになったことを挙げて、旧約から新約への流れの中でヨナ書の説き明かしを行っている。ブーゲンハーゲンはヨナが一つの説教によって、悪にまみれたニネベの町を悔い改め

(3) 伊勢田奈緒「デンマーク王クリスチャン3世宛ての書簡を通して見られる宗教改革者ブーゲンハーゲンの苦悩についての一考察」『キリスト教研究年報』第4号、2016年3月、7～18頁

(4) クリスチャン3世への書簡に大学は10月24日に再開し、ヨナ書の講義を始めたことを記している。（Dr. Johannes Bugenhagens Briefwechsel. ed. by Otto Vogt.Stettin: Saunier, 1888. Reprint. 1992, 412 (no.206, Nov.29, 1547)

(5) Scriptorum Publice Propositiorum A Professoribus in Academia VVitebergensi, Ab anno 1540, usqae ad annum 1553, TOMUS PRIMUS (Wittenberg: Rhau, 1560), c (194)

させたことに驚きを持ちつつ、さらにそのニネベの人々の悔い改めについて注目している。出版された『ヨナ書注解』は総ページ数424頁であるが、そのうち8頁は導入、続いて77頁はヨナ書の忠実な聖書釈義であり、その後、303頁を割いて、力を入れているのがヨナ書3章についての彼の解釈である。最後は、補遺となっている。全体的に、彼はヨナ書を紐解きつつ、中心テーマはルターの教説である信仰義認である。同時に、1548年5月に成立した、聖職者の妻帯とニ種聖餐を暫定的にプロテスタントに認めものの、信仰内容や礼拝はカトリック的であるアウクスブルクの帝国議会で成立したアウグスブルク仮信条に対する彼のとった行動とその思いについて、そしてシュマルカルデン戦争に関わった者の悔い改めへの招き、礼拝様式の伝統とこれまでの教会の歩みについて真摯に吟味している。さらに、彼はローマ・カトリック教会の試みをウルトラモンタニズムとして見なして非難した。彼は同時代の状況にしっかり向き合ってヨナ書を説き明かし、これからのことを論じている。補遺では16世紀早期のローマ・カトリック教会の儀式について記している。

2．ブーゲンハーゲンがルターの『ヨナ書講解』から学んだこと

『ヨナ書講解』については前述のように、既に師であるルターが出版していたが、そのルターの『ヨナ書講解』に対して、ブーゲンハーゲンはこの書をなぜ出そうとしたのであろうか。ルターとブーゲンハーゲンの『ヨナ書講解』を比較しながら彼がヨナ書から何を学んだのかを考察したい。

ブーゲンハーゲンは、ルターの教説に鼓舞されて故国ポンメルンからヴィッテンベルクへ赴いた1521年以来ルターの死の1546年までに至るまでの25年間、ルターから多くのことを学び、そして神学研究、教育活動、牧会だけでなく、彼自身の人生に関わるすべてにおいて、計り知れないほどの影響を受けた。このことは、ブーゲンハーゲンの『ヨナ書注解』を通してみても、よくわかることである。ブーゲンハーゲンは『ヨナ書講解』を公にするにあたって、トリエント公会議とアウグスブルク仮信条を念頭におき、ルターの聖書解釈、ルターの神学、ルターの礼拝改革に注意を向けながら、師の教えを固守しつつ、それに、彼の考え方を増し加えていったと考えられる。ルターも、ブーゲンハーゲンも、彼らの意図する宗教改革思想に対する人々の無理解の故に非難され、そのために両者とも思い悩んだ。彼らは、この状況についてやり場のない空しさを感じ、その思いを、ヨナの心情に重ねていったのであろうと推察する。

まず、ルターの『ヨナ書講解』が執筆した背景を見てみよう。この書は1525年に書かれ、ラテン語とドイツ語の2つの原語で、1526年ヴィッテンベルクのミハエル・ロッターによって出版された[(6)]。ブーゲンハーゲンは、当然、ルターのこの書を読んだはずである。ルターの『ヨナ書が出された時期は、農民戦争が勃発し、鎮圧されていく最中であり、同時に熱狂主義との対立の時にあたる。それまではルターに対抗する対象は、ローマ・カトリック教会であり、教皇派であり、その対立上の問題は宗教上のものであった。しかし、さらに、この頃よりルターは政治的、社会的問題に直面することになった。ヨナ書を通して、この直面する問題の解決への糸口を見いだそうとした理由については、彼は「ヨナはこの問題にぴったり合致しており、見事ですぐれた慰めを与える信仰の模範となっていて、全世界に対して神の慈愛の偉大で驚くべきしるしを背負っているからである」と記している。農民戦争は、ルターの宗教改革運動が浸透していく過程において起きたものであるが、1524年5月にルターの宗教改革に刺激されてドイツ西南のシュチューリンゲンで勃発した。この暴動が続いていた翌年の春、上部シュワーベンで「キリスト者同盟」が結成された。まもなく全シュワーベン[(7)]農民

(6) マルティン・ルター『ルターの預言者ヨナ講解』岸千年（訳）、グロリア出版、1982年、1頁

(7) ドイツ南部の歴史地名で現在のバーデンウュルテンベルク州の南部，バイエルン州の南西部およびスイス東部とアルザスを含んだ地域である。地

の主要な要求をまとめた「12ヶ条の要求」がこの同盟によって発表された。この要求は聖書の言葉を引用して、その要求の正当化を神学者に問うという福音主義の傾向を含んでいた。この要求の最後の条項に、15名の神学者の名前があげられ、その筆頭にルターの名前が挙げられていたことからもルターに対して、いかに農民たちが期待していたかが推察できよう。ルターは農民達からの呼びかけに対して、『農民の12ヶ条に対する平和勧告』を書き、農民たちがキリストの教えに従い、主張、行動しているとしながら、実際はキリストの教えにまったく従っていないと指摘しつつ、他方、耐えること、十字架がキリスト者の権利であることを説いた。しかし、ルターのこの書が出る前、1525年4月にシュワーベンの農民は蜂起したのであった。まさに、ヨナ書4章の「そこには、十二万以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから」と神が指摘されているように、右も左もわきまえない農民達は城、教会、町、村などを襲い、略奪、放火をして荒れ狂っていったのである。そして各地に波及していくこの急激な展開について、恐らく、ルターにとっては、想定外の事態であった。彼は『農民の殺人・強盗団に抗して』と題して著書を発表し、この中で、農民が統治権力に抗して、略奪や殺害をなしていることを激しく非難し、同時に、領主側が剣をとってこれを鎮圧すべきことを主張した。結局、農民側は諸侯と司教たちの防衛軍に敗れて、約10万人があちこちで虐殺され、また生き残った者も長期にわたって賠償金を支払わされることになったのである。この一連の事件によって、ルターへの農民大衆の支持は失われた。そして、残念なことに南ドイツの多くの地で農民に対する諸侯の勝利は、イコール、カトリック教会による対抗改革の勝利に結びつくことにもなったのである。農民戦争はルターが、二重の困難－ルターによる宗教改革運動の呼びかけに応えたドイツ国民の大部分を占めていた農民たちが動乱、反乱、暴動を引き起こしたことによってルターを攻撃する側の格好の材料となったこと、またルターと農民たちの間に離反、対立が生じたこと－を背負っていくことになる出来事となった。一方、ルターは、深い悔悛の念をいだいていたことと推察する。彼は『ヨナ書講解』において、ヨナを通して「しかしヨナは、またはるかに的からはずれていて、人を見捨てることによって過ちをおかした。なぜなら、ニネベに神の恵みがあることは不可能と考え、ひたすら神の怒りを待ち望んだとき、神の恵みは最も強くあったからである。そして、民衆は神のことばを聞かず、またこれを受けとめもしないとヨナが考えたとき、民衆は最大の謙虚をもって、最高に恵みを与えられるので、何びとに対してもさばくべきでなく、また何びとに対しても、望みを失うべきではないということ、そして、ユダヤ人が人間的な考え方をしたように、神の恵みに対して場所とか目的とか、時間とか尺度とか、人物とか功績とかを、ヨナは考えるべきでなかった。第二に、われわれは、このことから神の命令に従うべきこと、他のなにものにも目をくれるべきではないこと、このことが、他の問題とどのように一致するかといったことを、問いただすべきではない、ということを学ぶべきである。」[8] と説明しているが、恐らく、これはルターがヨナの行為の中に自分の姿を見出し、暴徒化した農民たちが神のことばを聞かず、受け止めもしないとして、彼らを見捨ててしまったことを悔いたのであろう。

また当時のルターに立ちふさがったのは熱狂主義者たちでもあった。ルターは「神の霊は神のことばを媒介にして働く」とし、聖霊が神の御言葉である聖書とともに与えられるのであり、聖書と聖霊とは信仰者にとって共に欠くことができないものであると考え、改革は強制ではなく、むしろ愛をもって色々と配慮しつつ漸次的に進めていくべきだと考えていたのに対して、熱狂主義者たちは、聖霊

名は1世紀頃居住したスエビ族に基づくが，この地名が一般化したのは11世紀以降で，それ以前は西ゲルマンのアラマンニ族にちなんでアラマニエンまたはアレマニエンと呼ばれた。

(8) マルティン・ルター『ルターの預言者ヨナ講解』、1982年、50～51頁

を重視し、聖霊の直接的な働きを強調し、「神のことばなどはいらない。神のことばなしで神の霊が直接に人間の霊に働きかける」とし、急激で極端な目に見える改革を推し量ろうとした。1521年、ルターがヴィッテンベルク不在の中、運動の主導権を握ったカールシュタットは城塞教会での主の晩餐式において祭服の着用、犠牲の供え物の奉献、聖体拝受をすべて拒否し、平信徒には聖杯を与えるという形式で行った。また聖職者たちはみな結婚すべきとしたり、公同礼拝での絵画、オルガン、グレゴリオ聖歌の使用の反対、修道会の解散、ドイツ語による礼拝、教会堂内の絵画の撤去、乞食行為の禁止などを行った。このような急激な変革によって、ヨナ書にある「そこには、十二万以上の右も左もわきまえぬ人間」である民衆が、大規模な聖像破壊が行ったのかもしれない。いわゆるヴィッテンベルクの騒動と呼ばれるものであるが、この事態にルターはヴィッテンベルクに戻り、聖書主義に立って現実の問題の収拾に務めた。ルターは「わたしは良心や魂を罪から解放しようとする。これに対して、カールシュタットは律法をもってはじめ罪を科そうとする」と主張し、まず、彼は、神の言葉に聞くことを行った。1522年3月6日にヴィッテンベルクに戻ってきた彼は8日間を通して、罪の自覚、キリストによる赦し、隣人への愛を訴えの説教が行われた。変革の産物は一時的に元に戻し、古い礼拝様式に回復された。これから徐々に宗教の改革が行われていくことになった。これ以降、彼はさらに神のことばを強調し、教皇派だけでなく、ルターに立ちはだかる熱狂主義者たちにも対抗していった。たとえば、『ヨナ書講解』の3章の説き明かしの中で、「神のことばと命令なしには、なにもすることができないことを、われわれに認めるように記されている。なぜなら、神の第一戒が、ヨナの不従順によって無効にせられたからである。それゆえ、神がその戒めを繰り返し給わなかったなら、ヨナは、その戒を行うべきかどうかを知らなかったであろう。……（略）……第二のこの指令には、神の命じたもうことを宣べ伝えよということが加わっていたのである。従って、職務と職務において語られるべきことばの二つは、神の指令のなかで捕らえられなければならない。このように正しくされるなら、実を結ぶのである。」[9] と述べて、神のことばの重要性を主張している。

他方、ブーゲンハーゲンがヨナ書を出した背景は、既に述べたように、シュマルカルデン戦争後に結ばれた『アウグスブルク仮信条協定』におけるアディアフォラ問題が発端にある。この協定は皇帝カール五世が1547年9月1日にアウグスブルク帝国議会を開き、公会議で結論が出るまでという条件でカトリック側とプロテスタント側の宗教的対立の解決を図ったものであった。この時、決められたのが「仮信条協定」であり1548年帝国法として制定された。しかし、カトリック諸侯は強く抵抗し、一致して適用を拒否した。しかし、プロテスタント側は地域によって異なり、南ドイツのプロテスタント諸都市には武力でこの協定が押し付けられた。一方、北ドイツでは、仮信条協定には非協力的であった。ザクセン選帝侯となったモーリッツはメランヒトンらの意見を聞いて、打開策として企図したのが「アディオフォラ」（中立の無規定事項）の概念であり、この概念を駆使して譲れるものは譲って、仮信条協定への妥協を図った。ところがこの仮信条に対して、ルターの固有の改革精神を保持しようとする保守派の人々、すなわち、フラキウス・イリリクスおよびルターの旧友であるニコラウス・フォン・アムスドルフ（Nikolaus von Amsdorf, 1483 － 1565）のもとに純正ルター派が結成され、マグデブルクを中心に活動することになり、メランヒトンらと論陣を張ることになった。ブーゲンハーゲンは、メランヒトンと共に、アウグスブルク仮信条協定を受け入れたが、なぜ、彼がこれを受け入れたのか、考えてみよう。シュマルカルデン戦争中、まさにヴィッテンベルクが皇帝側の手に落ちようとし、ヴィッテンベルク大学が閉鎖された時、彼の命も保証されない危険な状況にあっ

[9] マルティン・ルター『ルターの預言者ヨナ講解』、113～114頁

た。しかし、彼は故郷ポメルンに逃げることはせず、ヴィッテンベルクに留まり、ヴィッテンベルクの住民を慰め、励まし続けた。彼は住民に説教をとおして個人的な安全を求めて他へ逃げるのではなく、福音主義の教会の将来を思い、ヴィッテンベルクに留まるように強く求めた。その後、既に上記で述べたように、戦争に勝利した皇帝カール五世はアウクスブルクに帝国諸侯、都市代表者を集め、ルター派を異端とする暫定協定の受諾を迫った。この時、マクデブルクだけが協定の受諾を拒否したため、皇帝はモーリッツを派遣して同市を包囲させた[10]。皇帝に対してメランヒトンやブーゲンハーゲン等神学者たちのとった態度に、かつての同僚であったマグデブルクの神学者たちは「たとえ、ヴィッテンベルクの学校が何千になろうと、我々は悪となる彼ら[11]を許すよりも、罰することが正しいのだ。なぜなら、彼らの内の若者[12]は誤った意見に惑わされ、福音に反する教えにゆがめられているからである。そして彼らが故国に戻ったとき、彼らは他のキリスト教教会をすべて破壊するからである。」と激しく非難した[13]。マグデブルクの神学者たちがブーゲンハーゲンに対して、口汚く罵しったのは、シュマルカルデン戦争処理の際、アウグスブルク仮条約採用の礼拝の際、彼が、ローマ・カトリック教会が採用していた礼拝様式に則り、挙行したことにあった。かつてヴィッテンベルクで同労者であり、1537年に共にシュマルカルデン条項に署名したニコラス・アムスドルフを含むマグデブルクの神学者たちに非難されるということは彼にとって屈辱的で、いたたまれないことであったに違いない。彼は自分の心境を「……私はこれまで敬虔で賢明な者たちがずっと試されてきた、沈黙や忍耐について知るように努めています。」とし、信頼するデンマーク王クリスチャン三世に伝え、ローマの信徒への手紙12章9節「主は「復讐は私のすること、私が報復する」という神の言葉の下、神を信じつつ、新しくザクセン選帝侯になったモーリッツに対して、対立ではなく、和解―調和と一致―で臨もうとしたことを伝えている[14]。皇帝に味方し、ザクセン選帝侯位と広大な領地を得たモーリッツはヴィッテンベルク大学の再開を保証したが、ブーゲンハーゲンは1548年に「われわれはイエス・キリストの純粋な福音を再び教えることができ、教皇派や熱狂主義の誤ちなどを非難することができる自由を与えられ、教授として再び招聘され、福音主義に基づいた講義ができることを」感謝し、モーリッツ自身が「私は大学を縮小したいのではなく発展させたいのだ」と告げたことを記している[15]。

以上、両者の『ヨナ書講解』の背景から言えることは、彼らは立ち向かわなければならない問題に苦慮していたことである。そして、自分のとった行動に対して、ともすると逃げ出したくなる心情を克服するためにも、ルターが選んだテキストはヨナ書であった。ブーゲンハーゲンがヨナ書を選んだのは、神から逃げ出そうとしたヨナから、自分の道を探し求めていたその師であるルターの苦闘を

(10) しかし、自身プロテスタントだったモーリッツは皇帝のやり方に許容できなかった。そこで、マクデブルクが降伏したかのように見せかけて包囲を解き、フランス王アンリ2世とシャンボール条約を結んで逆にアウクスブルクのカール5世を攻撃した。皇帝はインスブルックに逃亡し、弟のフェルディナント1世にモーリッツとの和平交渉を委ねた。1552年8月、パッサウでルター派を容認する旨の和平交渉が結ばれた。これは1555年のアウクスブルクの和議の原型となった。

(11) ブーゲンハーゲン達を指す。

(12) ヴィッテンベルクで学ぶ学生達を指す。

(13) Martin J. Lohrmann, Bugenhagen's Jonah, Lutheran Univ. Press, 2012, p.236

(14) Dr.Johannes Bugenhagens Briefwechsel. ed. by OttoVogt. Stettin: Saunier, 1888. Reprint. 1992

(15) Wie es vns zu Wittemberg in der Stadt gegangen ist/in diesem vergangen Krieg/bis wir/durch Gottes gnaden/erloeset sind/Vnd vnser hohe Schule/durch den Durchleuchtigsten/HochgebornenFuersten vnd herm/Herrn Moritzen/Hertzogen zu Sachssen/ des heiligen Roemischen Reichs Ertzmarschahl vnd Churfuersten/Landgrauen in Doeringen/ vnd Marggrauer zu Meissen/vnsern gnedigsten Herrn/widerumb auffgericht ist.Wahrhafftige Historia/beschrieben durch Johan Bugenhagen Pomern/Doctor vnd Pfarherr zu Wittemberg. M.D.XLVII(Herzog August Bibliothek Yv1754Helmst,8°　,48p.

思い起こしたからではないだろうか。

『ヨナ書講解』における両者の共通点と相違点について考察してみたい。聖書解釈については、基本的には同様な解釈であると言える。神学においては全面的にルターを支持し、擁護してきたブーゲンハーゲンであるので、その解釈はルター的であるのは否めない。しかし、二人の聖書解釈の方法は異なっている。ルターの手法は一節一節を読み説いていくものであり、ブーゲンハーゲンは、一章ごとに、彼の掲げたテーマに沿って読み解いていく方法をとっている。ブーゲンハーゲンは「悔い改め」のテーマを重視していて、3章ではニネベの人々の悔い改めについて丁寧に分析しつつ、自身の直面している現在の問題に膨らませて綿密に語り、4章へとそのテーマを繋げている。

ルターとブーゲンハーゲンのこのヨナ書を書いた状況は上述したように、ある意味、類似している。ルターは、ヨナ書を講解するにあたって、前にも述べたが、農民戦争後に書いている。ルターは、ヨナが信仰のない人々に信仰を通して罪赦されるということを神の言葉を通して説教したヨナ書こそ、農民戦争後に希望を失った人々に対して、適切なテキストを見なしたと思われる。また、ルターは自分がとった言葉と行為を誰も理解してくれないその心情をヨナに投影していたのかも。他方、ブーゲンハーゲンがヨナ書を講解したのは、ルターのものが発行されてから20年後のことである。シュマルカルデン戦争後に出されたブーゲンハーゲンの『ヨナ書』は、ルター派内の分裂の混乱の中にあって、信仰への迷いや、これから起こる戦争に対する不安の中にあるヴィッテンベルクを中心とするザクセンの人々に、ニネベの人々の悔い改めと回心を伝え、さらに彼自身、ヴィッテンベルクの人々と共に歩いていく決意を託したものであったと考える。

次に両者のヨナ書講解の概観を見てみよう。先ず、ルターについてだが、第一に、ルターは、ヨナの召命は異邦人の地へ説教者としての派遣とみなしている。第二に、悪徳に満ちたニネベの町が神の言葉によって変わっていく様子を示している。第三に、ヨナは正義であるが罪人である代表的人物とみなし、神の聖なる預言者である者の中で罪ある者であることがはっきりわかる人物として扱っている。第四に、ヨナが罪から自由になり救われることについて、信仰による罪の赦しと神の義から説き明かしている。すなわち、ニネベの人々が救われるために努力したのでも、預言者であるヨナが懸命に働いたからでもなく、ただ信仰のみによって救われたことを強調している。以上の点についてはブーゲンハーゲンもルターとほぼ同様に解説している。しかし、ルターとの相違点は、ブーゲンハーゲンはヨナのテーマについて、ヨナを予定説や運命論的なもののしるしとしてではなく、圧倒的にキリストの受難と復活のしるしとして見ている。さらにルターはヨナ書4章にはあまり注意を払っておらず、ヨナが神の不従順な聖徒、聖人であり、まさに罪人の代表的例としてあげ、彼を称賛に値する人物としてはまったく考えていない。他方、ブーゲンハーゲンは、全体的にヨナという人物を見ながら、キリストの受難と復活をイメージしている。すなわち、ブーゲンハーゲンが重視しているマタイによる福音書12章40節『ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように人の子も三日三晩、大地の中にいることになる』について、ルターは、「マタイ伝12章において、キリストご自身は、ご自身とヨナとの比較を示しておいでになる。解説ではなくて、実例である。なぜなら、キリストはヨナだけをとりあげ、ヨナが鯨の腹のなかにいたときと同じように、ご自身も地中に死んで横たわりたまうたことを語り、それをヨナのしるしと呼んでおいでになるからだ。すなわち、それはヨナの体験に似たしるしである。なぜなら、霊的解説において当然の仕方であるように、キリストは三日という期間に霊的な意味をつけたまわなかったからだ。従ってこれは、比喩というより、むしろ比較である。そしてキリストご自身が、これを解説したまわないなら、だれも解説する権利をもっていないのである。[16]」とし

[16] マルティン・ルター『ルターの預言者ヨナ講解』、150～151頁

ているように、ヨナが三日三晩、鯨の中にいたことと、キリストが十字架にかかり復活されたことを、ただ端に三日間の試練の体験のしるしとして、両者を比較しているように見られる。また、ルターは、ヨナがとうごまの木を嘆き悲しんでいる姿も、神が人間の破滅を悲しんでいるものとして解している。それは、『お前は、自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられようだろうか。そこには、十二万以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから』と神は言っているので。[17]」という箇所から、ヨナがとうごまに対して怒っているのは、判決を下されるニネベの人々に対する神の憐れみを示しているのだとしている。さらに、ルターはヨナに対して、罪びとであるヨナに神は憐れみを示していると考えている。

他方、ブーゲンハーゲンは3章で魚の腹の中での経験について、ヨナのあきらめを記しているのではなく、それはヨナの罪の悔い改めと、ヨナの神への信仰告白と、そして神への感謝の祈りを記しているとする。死の淵にあるヨナが神の慈悲を思い、与えられた命に感謝し、その後、奇跡的に自由を得た経験に彼は注目をしている。彼はニネベの人々が奇跡的に救われたことをもって、期待も価値も少ないときにも、神は恵みを与えられるということを説き明かしている。3章8節の「その手から不法を捨てよ」のブーゲンハーゲンの解釈は力強いものであり、まさに当時の人々の生活に向けて、述べられているものである。彼は律法と福音を通して神の言葉は人々の不信と罪に立ち向かうことができると考えていたのであろう。そして、ブーゲンハーゲンはヨナ書を通して神が人々に自由を約束し与えることをそして、その自由は信仰を通して可能になるものであると説いた。ブーゲンハーゲンにとって、罪の赦しと救いは、抽象的な、あるいは精神的なカテゴリーではない。それらは神と隣人に対して新しい自由と新しい命を与えられるとした。彼は、ヨナ書の中でニネベの王が発した「人も家畜も、牛、羊に至るまで、何一つ食物を口にしてはならない。食べることも、水を飲むことも禁ずる。人も家畜も粗布をまとい、ひたすら神に祈願せよ。おのおのの悪の道を離れ、その手から不法を捨てよ。そうすれば、神が思い直されて激しい怒りを静め、我々は滅びを免れるかもしれない。」の言葉に注目した。ブーゲンハーゲンは、ヨナの「あと四十日たてば、ニネベの都は滅びる」という説教をニネベへの破壊メッセージとして解釈せず、ヨナの信仰と慈悲の訴えと解して、理解した。そして、ニネベの人々はこのヨナのメッセージがあったからこそ、自由を得て救われたと理解した。

ニネベの救いについてブーゲンハーゲンは、ルターの信仰義認の点から解釈しようとした。そして、ニネベの王が回心したことに注目し、ヨナ書の3章9節「そうすれば、神が思い直されて激しい怒りを静め、我々は滅びをまぬかれるかもしれない。」の聖句から論ずる。「信仰義認の義はわれわれの外」にあり、すなわち、ニネベの人々の外にあり、「われわれのものでない義」は、すなわち、ニネベの人々のものでない義は、「自ら積極的獲得したもの」でなく、すなわち、ニネベの人々自ら積極的に獲得したものでなく、「受動的にわれわれに与えられる」ものであり、すなわち、ニネベの人々に受動的に与えられたものであり、「罪人であるニネベの人々を神が受け入れることが出来ない」にもかかわらず、「神が既にニネベの人々を受け入れてくれたこと」を受け入れること、これが、信仰義認であり、この神のみ業こそ、神の賜物であり、だからこそ、キリストのみが、ニネベの人々を立ち返らせることができるのであると解釈したのである。

ここで、さらに詳しく見ていくと、両者とも自身が伝道者としての務めを議論するために1章2節について、注目している。「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪は私の前に届いている。」につ

[17] Bugenhagen, Johannes, IONAS PRO/PHETA EXPOSITUS/IN THERTIO CAPITE, Wittenberg, Creutzer, 1550, Biiii-v

いてである。両者とも神のヨナへの派遣命令を自分自身の神からの命令と置き換えて考えている。ルターは農民戦争における、またブーゲンハーゲンはシュマルカルデン戦争における、政治的無秩序、社会の混乱という時代に身をおきながら、聖書の中に打開策を求め、神の言葉の力を強く信じ、右往左往している人々に「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ」というその神の言葉を伝えていく伝道者像を自分自身の中に思い描き、自身を奮い立たせていたのであろう。ルターは「ここで神がユダヤ人だけでなく、異邦人をも招きたもうことを見る[18]」として、ヨナを通して神から召された者の使命を示している。他方、ブーゲンハーゲンは「さあ、大いなる都ニネベに……」の解釈をルターよりもさらに明確にし、召命者とは、教会において公にキリストに仕える者として任命された者であると断言し、ローマの信徒への手紙1章を用いながら、主イエス・キリストにより、その御名を広めてすべての異邦人を信仰による従順へ導くために恵みを受けた者であり、聖霊を受け神に祈り求める者だと明解に示している。これは、ブーゲンハーゲンがこれまで数多くの教会規則作成に関わってきた経験による自信がこのように語らせていることと解せよう。

ここで、重要な点が見いだせる。それは今まで、ルターの教説をそのまま、受け取り、理解していたブーゲンハーゲンだったが、ヨナ書講解では、ルターの教説を学び、それをさらに拡張して考えるようになっていることである。上記のルターが考えてきた伝道者についての考え方にも言えることであるが、ヨナ書4章において、ヨナの偏狭な考え方をルターは教皇派の排外的で、優越的な面を照らし合わせて批判しているが、ブーゲンハーゲンは、ヨナの説教によって異邦人であるニネベの人々が悔い改めることができたことを大いに評価し、信仰義認の考え方に基づいて、すべての人に与えられている神の恵みを想定している。これは、マグデブルクの神学者たちを意識して、彼はあくまでも福音主義を固守することを公に意思表明しているとも見られよう。

ルターもブーゲンハーゲンも教皇制を霊的なキリスト者の運動と同一視していた。特に古代のモンタノス主義として見なしていた。モンタノス主義は2世紀中頃、小アジアのフルギアでモンタノス（Montanos, ~170頃）により始められた運動で、彼は聖霊が急速にそそがれることを待望し、すでにその最初の顕現を見たとした。モンタノス自身も女予言者プリスカとマクシミラとともに熱狂的言辞をもって、天のエルサレムがフルギアのペプザ付近に下り、世界の終末が近づいたとした。この運動はアフリカに渡り、急速に禁欲主義的傾向を帯び、再婚や迫害時の逃亡を厳禁し、厳しい断食を勧めたりした。ブーゲンハーゲンがモンタノス主義と名指しする対象の一つは、ヨーロッパで最も名高いカトリック大学であるルーヴァン大学の神学部であった。ルーヴァン大学は、伝統的礼拝の慣習を神学的に論議し、ローマ・カトリック教会と、ヒエラルヒーの教皇制を神学的に支える大学であった。仮信条協定において、ブーゲンハーゲン等、ヴィッテン大学教授陣は、先ず、人々をむやみに煽動することを拒否し、そして、暴政を正当化する権威を擁護しなかった。代わりに、彼らは皇帝カール五世には統治者としての真の義務と責任を思い起こすように念じ、ルターの教説と聖書主義を固守した。ヨナ書4章の講解において、ブーゲンハーゲンは、モンタノス主義をヨナの行動と見立て、また、神はすべての人に恵みを注ぐ方であるとし、ルターの解釈通り、古くからの慣習にとらわれているローマ・カトリック教会とそれを支えるルーヴァン大学の偏狭的で選民主義的な考え方を批判した。

前後するが、ブーゲンハーゲンは、ヨナ書3章についての論文に「冒涜者モンタノス主義者」と題を付けている。ここではルターの宗教改革的転回について記している。彼は常にルターの傍らにあってこの体験を聞いていたことであろう。ルターは死の前年、1545年、ラテン語による彼の全集の出版にあたって第

[18] マルティン・ルター『ルターの預言者ヨナ講解』、27頁

一巻の序文で、どのようにして宗教改革が進展していったか、その際、ルター自身の宗教体験の中心を回想している。ブーゲンハーゲンは、ルターから自分は「神は、罪人を、キリストを信じる信仰を通して義とする」という確信をもつようになったことを何度も聞き、また、ルターと議論していたことが推察できる。彼は、信仰義認こそ、モンタノス主義に対抗できる福音主義の教説であると理解していたのであろう。このようにブーゲンハーゲンは、ローマ・カトリック教会を古代の異端であるモンタノス主義として見なし、『ヨナ書講解』の中にある論文「冒涜者モンタノス主義者」で批判しているのである。その中で、「父、ルターがしばしば私に語っていた」として、ルターが語っていた信仰義認を受け継ぎ、復唱する如く、ローマの信徒への手紙 4 章 5 節の「不信心な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます」や、ローマの信徒への手紙 1 章 17 節の「福音には、神の義が啓示されていますが、それは始めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。」を用いて説明している。カトリックの神学者たちは、人間は神の恩恵なしには善を行うことはできないし、また救いは恩恵と人間である私人の努力の合作でもないとした。しかし、恩恵をどのように用いるかという点については、人間の側からの働きかけがあるという余地を残していた。つまり、神の愛に対して人間の側からの働きかけを認めていたのである。そこで人間の努力と神の恩恵を結びつけるものとして秘跡が重視され、多くの秘跡が考え出された。その結果、秘跡を取り扱う聖職者や教会が権威あるものとして強調されるに至ったのである。他方、ルターと彼に追随するブーゲンハーゲンの主張は、ローマの信徒への手紙の『正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。」を挙げながら、神の義を説明した。そして、ブーゲンハーゲンは『卓上語録』の中のうちの 1542 年のルターとの会話に触れて、ルターの回心についてのきっかけを「……私はこの塔の中のこの部屋で『義人は信仰によって生きる』と『神の義』という言葉について思い巡らせしていた時、やがて、われわれが信仰による義人として生き、神の義が信じる者に救いとなるなら、その義はわれわれの功績ではなく、神の憐れみである、と考えた。私の心は慰められた。というのは、われわれが義とされ、キリストによって救われるものが神の義であるからであった。その時、義しいとか神の義という言葉は、私には喜ばしいものに変わった。聖霊が、このことをこの塔の中で私に聖書によって啓示したのである」を挙げている。ブーゲンハーゲンの回心については、彼は神の愛について読んでいる時に、気づいたとしている。それは、神の愛であり、「私達は神に愛されている」という愛についてであるとする。以前、彼は、私達人間が神を愛するという神への愛を中心に考えていた。しかし、神が私達人間を愛してくださっているという「神の愛」について気づいた時、彼は回心したのだと述べている。ブーゲンハーゲンにとっては信仰義認は前提として神の愛が不可欠であると考えていたのだと推察される。それに対して、ルターはブーゲンハーゲンに、「神が我々を愛する」ということははっきりしているが、ヘブライ語聖書ではその愛の解釈は難しいと返答していることが記されている[19]。ルターの教説に賛同したブーゲンハーゲンの真の信仰とは、モンタノス主義のローマ・カトリック教会が長年、保ってきた良き行いとか、秘跡の執行などのような外面的な事柄には関係ないということであり、彼ははっきりとカトリック教会に妥協するものではないことを表明していると考えられる。

ルターは、ヨナ書 4 章において、「ヨナは神の恵みが異教徒に与えられることを喜ばなかったことは、不思議ではない。ご自分で考えてごらん、ユダヤ人にとっては、わたしが前に述べたようにイスラエルだけが神の民であって、異教徒はみな神の怒りのもとにあると、いつも信じていたのである。」と述べた後、「またいつにせよ、教皇の法令やローマ教会の習慣や掟をもたなかったり、守らなかった

[19] ワイマール版全集第 56 巻 17 頁, 27 － 172 行（以下 WA 56,17,27-172 と略す）

りするキリスト者を見かけたり、また、そのようなキリスト者がありうることを教える者は、どのような報いを期待しなければならないだろうか。いつでも、異端者とされて火刑に処せられるのだ。」と教皇派の現状の卑劣さを述べ、ニネベに行くことを望まず、また、ニネベが滅亡しなかったことに不満をもち、モーセの律法もユダヤ人の習慣もないのに、ニネベの人々が神の恵みをかちとり神の民となるのかを見せつけられるより、むしろ死んだがましだと思ったヨナの考え方と、律法を重視するユダヤ人と教皇派の考え方とを同一視して考えた。そしてまた、ユダヤ人はほかの者よりすぐれているはずだ、にもかかわらず、律法も預言者ももたないニネベの人々が恵みを得ているという不満やユダヤ人は律法を守り、実行しているのに救われないと不平を言うヨナの姿を描き、モンタノス主義の人たちを読み手に想起させている[20]。結論として、ルターは、神はユダヤ人だけでなく、人間全体を助ける方であるということを述べ、「われわれ異邦人はなにも労することなく、ユダヤ人に与えられたような神の恵みの約束もないのに、終わりの時に神の恵みに入れられているということを学ぶのである」とする。そして、ヨナ書4章の最後の「すると、主はこう言われた。『お前は、自分で労することも育てることなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。』」[21]の箇所をもって、十二万以上の右や左もわきまえぬ人間に注目し、彼らは、ユダヤ人のように、神の前で霊的または肉体的なことについて、外的、内的なことについて、どのように行動すべきかを教えるモーセの律法も預言者ももっていない者であることを告げている（ルターは、右は、内的な霊的な面、左は、外的な肉体的な面を意味していると考えている。）。すなわち、ルターは、人は体と魂をもって神に仕えなければならないと諭しているのである。

ところで、ルターは、圧倒的にヨナとヨナの説教に力点をおいているようであるが、ブーゲンハーゲンはヨナよりもニネベの町とニネベの人々に注目している。ニネベは神の町であったとして、ニネベの回心は究極的な神の力が働いているものであり、ヨナは神の激怒について説教しただけであったが、ヨナの非難の言葉を聞いてニネベの人々は、自分たちは死しか適切な刑はない程の罪人であると認めた。しかし、神の恵みによって彼らは神へ立ち帰るように導かれたと解している。彼は、ヨナ書3章で、このようにニネベの人々の信仰と悔い改めの業の関係を吟味している。詳しく見てみると、まず、聖書の中のニネベという都の創設を挙げている。すなわち、創世記10章によれば、ニネベは主の御前で勇敢な狩人であったニムロドによって建てられた都であったが、歳月を経て、悪弊が満ち、不道徳で、堕落したものとなっていったとする。しかし、ヨナによって、ニネベの人々は立ち帰ったことを述べつつ、他方、そのことに不満で怒った預言者ヨナに対して真の立ち帰りを力強く説明するのに用いているとしている。ヨナ書のテキストの最後は唐突で、あいまいな結論で終わっているけれども、ブーゲンハーゲンは、ヨナを謙虚で、悔い改めと、信仰心をもった預言者であったとして結んでいる。このように、ブーゲンハーゲンが理解するヨナは、最後に十字架の神学を示唆していると考えられる。すなわち、だれも完全な者はいないし、罪なく一点の汚れのないものはいないということを示している。ニネベの人々と比較すると、ヨナは確かに魚の腹にいるときに、神に罪を悔い、信仰告白し、神に感謝をしていた。しかし、ヨナは死にそうな時に、奇跡的に神の慈悲によって命を救われ、自由になっている。前にも述べたが、ルターは農民戦争中、『農民の殺人・強盗団に抗して』の中で、農民が統治権力に抗して、略奪や殺害をなしていることを激しく非難し、同時に、領主側が剣をとってこれを鎮圧すべきことを

[20] マルティン・ルター『ルターの預言者ヨナ講解』、129 － 140 頁

[21] ヨナ書4章10～11節。

主張した。このルターの好戦的な態度が、結局、農民の約10万人が虐殺され、生き残った者も長期にわたって賠償金を支払わされることになるという悲劇を生んだ。他方、ブーゲンハーゲンは争いを求めず、和解と和平でこの危機を乗り越えようとした。争わず、悔い改めによって平安が与えられるニネベの人々の姿は彼の理想の姿であったのかもしれない。彼は堕落してしまった預言者であれ、聖人であれ、神の恵みによってのみ回復することができることを示唆したのであろう。もちろん、アウグスブルク仮信条を喜んで受け入れた訳ではない。彼は、自分がとった行為によって精神的に苦しんだ。しかし、ブーゲンハーゲンはヨナ書を講解することで、人生の終わり近くにあって彼個人の信仰義認をしっかりと確かめられたのではないだろうか。

さらにブーゲンハーゲンが、ヨナ書で確信したことがある。それはヨナを通して自分自身の務め、使命を改めて確認したことである。かつて、ルターが祭司について7つの務めを挙げていた。すなわち、「祭司の務めは教えること(説教と、神の言葉を宣べ伝えること)、洗礼を授けること、聖餐式を執行すること、罪に定めたり、罪の赦しを宣言したりすること、ほかの人たちのために祈ること、献げものをすること、すなわち、自分自身を献げること、あらゆる教えと霊とについて判断すること、しかし、第一の、すべての務めの中で最も重要な務めは神の言葉を教えること（み言葉への奉仕）である」[22] としたうえで、万人祭司と教職について「私たちはすべて祭司であるとしても、誰もが説教したり、教えたりすることはできないし、そうすべきでもない。私たちは、説教し、教え、治める職務を委託する幾人かの者を群れの中から選別しなければならない。そのような職務を遂行するものはその職務からして祭司ではなくほかのすべての者への奉仕者である。それゆえ、もし彼が説教したり、奉仕したりすることを続けることができなかったり、それを欲しない場合は、再び教会の群れの中に帰り、その職務をほかの者に委託し、かれは普通のキリスト者以外の何ものでもなくなる。そのように、説教職あるいは奉仕職は、すべて洗礼を受けたキリスト者が一様に祭司の身分であることから区別される。その区別の理由は、その職務が公の奉仕にほかならず、またすべての者が等しく祭司である各個教会や全体教会によってその職務が―宣教の委託に対応して―委託されているからである」[23] とする。ブーゲンハーゲンは自分がアウグスブルク仮信条で取った行動に直視し、悔い改め、その上で、自分はこれからもみ言葉に聞き、御言葉を取り次ぐ者として、伝える者としての方向性を見出したのであろうと推察する。さらに人々を励ますものとして。

最後に、ブーゲンハーゲンの『ヨナ書講解』における善き業については、ルターの神の義とその成就の教説に基づいている。彼はルターやメランヒトンのように、キリストが治める真の教会は現在目に見える形では、隠れて、迫害されているままだと考えた。しかし、この信仰は静止するものでも絶望を導くというものではないとも考えた。ルターもブーゲンハーゲンも、ヨナ書4章の落胆した預言者ヨナに似た苦悩を経験したことは事実である。しかし、ブーゲンハーゲンは、さらにもう一時、ヨナという預言者を、そして、自分自身を再び見つめ直し、悔い改め、信仰の共同体から赦しを受けることを真摯に求めたと考えられる。つまり、彼はヨナ書の解釈に真剣に挑み、ルターの注釈を理解しつつ、さらに罪と憎しみに対する唯一の確かな魂の救いとしての悔い改めと罪の赦しを信じ、牧会者として生きようとしたのであると考えられよう。

3．総括

本稿ではこれまで、ブーゲンハーゲンがヨナ書から学んだことについて考察してきた。ヨナ書の講解から考察して判明してきたこと

[22] 倉松功（訳）、マルティン・ルター『教会の教職の任命について』、1923年、聖文舎、347頁

[23] WA41,210.14f

は、意外にも、ルターの死後、さらにシュマルカルデン戦争後に彼が受けた数々の試練を経たことで、彼はルターから独り立ち出来るようになったことである。すなわち、彼独自の聖書解釈が出来、そして彼がこれから取るべき自分の道を見いだせたことである。ルター生存中の彼は、ルターの人格に心酔し、彼の教説を全面的に受け入れ、彼の改革の協力者として働き、ルターに頼られていた反面、彼に頼り切っていた。確かに彼はルターと共に、聖書主義の下、信仰義認を掲げてきた。しかし、彼自身、その福音主義の下で一人歩き出来たのは、ルターを失ってからであった。試練の中にあって、ブーゲンハーゲンは、師と仰ぐ人から学んだことを自分の生き方に生かすために、聖書に答えを見出すことしかなかった。そこで、彼を導いたのが『ヨナ書』であったと推察できる。ルターが初めて、宗教改革の方向を見失いそうになった農民戦争直後に講解したのがヨナ書であった。ルターがヨナ書を選んだのは、序文の中で彼自身が言っているように直面していた状況打開の示唆となり、神の恵みの大きいこと、信仰の与える慰めのいかに強力であるかを学ぶことができるからであった。ブーゲンハーゲンもこの点は師と同様、ヨナ書によって今の困難な状態を打破し、これから進むべき道を求めたと思われる。ヨナ書は全部で4章だけの短いものであるが、しかし、そこには神の救いが力強く語られている。彼には自分自身の救い、そして牧会者として人々を神のことばによって救い出す使命があることをヨナ書によって改めて見いだすことができた。特に、彼はヨナ書3章に注目したが、これはルターとは異なっていた。それまでは彼は聖書理解も、神学的解釈も、ルターの教説になぞるように理解していたと考えられる。しかし彼は、ここで、初めてルターの解釈以上のものへと進むことができた。それは、ヨナについてではなく、ニネベの信仰と悔い改めの業に注目したことであった。当時の彼はルター派分裂の中、裏切り者として誹謗中傷を受け、それに反論するにも聞く耳をもってくれない者たちを相手に、精神的に弱り果てていたとみられる。彼は自分がとった行動を理解してくれる者がいないこと、そしてその行為が非難囂々であることは、心を痛めていた。もしかしたら、彼は自分が取った行為を非難されるものではないと自分を正当化しようとしていたのかもしれない。彼が反論したかったのは宗教に対して寛容であるとか、皇帝側についた卑怯者とか、カトリック側への妥協とか、そのような彼に対する申し立てに対して、彼はただ、ヴィッテンベルクを守りたかったことを伝えたかったのではないだろうか。しかし、彼はヨナ書を読み込むことで、自分の行動を正当化しようとした自分自身の弱さ、罪深さを振り返り、悔い改めつつ、ルターの教説である信仰義認を初めてまさに自分のものとしたのであったと考えられる。そして師であるルターから学んだものに、さらに自分自身の解釈を付け加えていった。彼はヨナ書によって自分の務めであるヴィッテンベルク市の牧会者として生きることを再確認することができたのであると考察する。

一次史料

Johannes Bugenhagen, IONAS PRO/PHETA EXPOSITUS/IN TERTIO CAPITE, TRA/ctatus de uera poenitentia, quam Chri=/stus commendat nobis in Niniuitis, & de falsa poeni/tentia, quam doctrinae daemoniorum post Apo/stolos inuexerunt, tantum per opera/nostra,excluso Christo./Ibidem, Historia certa,ex probatis Scri=/ptoribus, diligentia &iudicio collecta, quwmadmon=/dum post defunctum hac unita Iohannem Euangeli=/stam, coeperint defectuines a fide, doctrinae daemonio=/rum sub specie uerbi Dei, prohibitions nuptiarum & /ciborum,uota coelibatus, pulchrae ordinations & spi=/ritualitates, quae vocabantur perfections Eccle=/siae, quae adhuc regnant, solae faciunt Spi/rituals sine Spiritu sancto, per Spiritu sancto, per Spiri=/tum

nouum & Paracletum/Montanistarum & c./Idem caput repurgatum ab impiis / & blasphemis dubitationibus.Wittenberg: Creutzer, 1550.
Dr.Johannes Bugenhagens Briefwechsel. ed.by Otto　Vogt.Stettin:Saunier, 1888. Reprint. 1992, 412 (no.206, Nov.29, 1547)
Scriptorum Publice Propositiorum A Professoribus in Academia VVitebergensi, Ab anno 1540, usqae ad annum 1553,TOMUS PRIMUS (Wittenberg: Rhau, 1560)
マルティン・ルター『ルターの預言者ヨナ講解』岸千年（訳）、グロリア出版、1982 年

参考文献

Martin Brecht,Martin Luther, Minneapolis, 1946
Irene Dingel und Stefan Rhein,Der Spate Bugenhagen, Leipzig, 2011
E.H.Dunkley, The Reformation in Denmark, London, 1948
Infried Garbe,Hainrich Kroger(ed.), Johannnes Bugenhagen, Leipzig, 2010
L.W.Graepp,Johannes Bugenhagen, Grtersloh, 1897
Helmuth Heyden,Kirchengeschiche Pommerns, 2nd, ed, Köln-Braunsfeld, 1957
Hendel,Kurt, “Johannes Bugenhagen, Organizer of the Lutheran an reformation” in Lutheran Quarterly vol.18, 2004, 43-75
Paul Douglas Lockhart, Denmark, 1513-1660, Oxford, 2007
Martin J.Lohrmann, Bugenhagen’s Jonah, Mineapolis, 2012,
While H.Meinhof, Dr.Pommer Bugenhagen und sein Wirken, Halle, 1890
Andrew Pettegree(ed.), The Early Reformation in Europe, New York, 1992
Werner Rautenberg,Johann Bugenhagen, Berlin, 1958
Rogge,Johannes Bugenhagen. Quellen. Ausgewahlte Texte aus der Geschichte der christlichen Kirche,hrsg.v.H.Ristow u.W.Schultz, Heft 30-11, 1962
Walter M.Ruccius, John Bugenhagen Pomeranus;A Binographical Sketch, 2015
E.Sehling, Die evangelischen Kircheordnungen des XVI., Jahrhunderts, V., Leipzig,1913
Karl August Traugott Vogt, Johannnes Bugenhagen Pomeranus, Elberfeld, 1897
Evnst,Volk, Dr.Pormmer, Johannnes Bugenhagen, Hams,1999
石原謙『宗教改革者ルターとその周辺』新教出版社、1967 年
伊勢田奈緒「キリスト教擁護者としての皇帝カール五世についての一考察」『和泉短期大学研究紀要』第 26 号、2006 年 3 月、1 ～ 10 頁
伊勢田奈緒「宗教改革者ブーゲンハーゲンの目指した教育改革についての一考察―ブーゲンハーゲン自身の生き方を支えたもの　―」『キリスト教研究年報』第 2 号、2014 年 3 月、17 ～ 28 頁
伊勢田奈緒「デンマーク王クリスチャン 3 世宛ての書簡を通して見られる宗教改革者ブーゲンハーゲンの苦悩についての一考察」『キリスト教研究年報』第 4 号、2016 年 3 月、7 ～ 18 頁
ウィリストン・ウォーカー『宗教改革』塚田理／八代崇（訳）、ヨルダン社、1983 年
G.R. エルトン『宗教改革の時代』越智武臣（訳）、みすず書房、1973 年
角田文衛（編）『北欧史』山川出版社、1955 年
金子晴勇『ルターとその時代』玉川大学出版部、1985 年
倉松功『ルターとバルト』ヨルダン社、1988 年
倉松功（訳）、マルティン・ルター『教会の教職の任命について』、聖文舎、1923 年
R. シュトウッベリッヒ『メランヒトン』倉塚平（訳）、聖文舎、1971 年
徳善義和『キリスト者の自由』新地書房、1985 年

徳善義和『マルチン・ルター－生涯と信仰』教文館、2007 年
徳善義和（他 7 名訳）『信仰告白・信仰問答』（宗教改革著作集第 14 巻）教文館 1994 年
林健太郎（編）『ドイツ史』山川出版社、1977 年
K. ブラシュケ『ルター時代のザクセン』寺尾誠（訳）、ヨルダン社、1981 年
Ｐ．ブリックレ『ドイツの宗教改革』田中真造／増本浩子（訳）、教文館、1991 年
マルティン・ルター『ルター著作集』第一集第二巻、聖文舎、1963 年
マルティン・ルター『ルター著作集』第一集第三巻、聖文舎、1969 年
マルティン・ルター『ルターとその周辺Ⅰ』（宗教改革著作集第 3 巻）徳善義和他二名訳、教文館 1983 年
マルティン・ルター『ルターとその周辺Ⅱ』（宗教改革著作集第 4 巻）徳善義和、伊藤勝啓訳、教文館 2003 年
マルティン・ルター『ルター著作集』第一集第二巻、聖文舎、1963 年
マルティン・ルター『ルター著作集』第一集第三巻、聖文舎、1969 年
マルティン・ルター『ルター著作集』第二集第 4 巻、徳善義和他二名訳、2007 年

礼拝を通しての学び
――年生全員からのアンケートを通して－（研究ノート）

伊勢田奈緒、中原陽三、山田美代子、崔瑛、金承子

１．はじめに

キリスト教大学の建学の精神を学生たちに直接、吹き込む場が先ず、礼拝であり、そしてキリスト教関連の授業であり、またキリスト教行事であると考える。クリスチャン教員が大学において率先して建学の精神を今までもこれからも問い続けていかなければならないと痛感している。しかし、静岡英和学院大学での現状の問題はクリスチャン教員の数が少なく、学長を含む宗教委員であるクリスチャン教員９名（外国人教員５名）のうち、プロテスタント教員６名、カトリック教員３名という構成になっている。それぞれの教員が複数の委員をしている関係で、なかなか、クリスチャン教員がそろって宗教の行事などに参加することが難しい現状であるが、それでも今回、５名のクリスチャン教員が協力して学生への礼拝に関するアンケートフォームを作成し、礼拝にてアンケートを行うことができた。この結果を下にして、キリスト教大学としての礼拝について、真摯に向き合って検討することにした。尚、今回は、２０１６年前期の最後の礼拝日に大学一年生全員に実施したアンケートの結果と各教員が担当した学科の学生のアンケートに対する考察を記載した。引き続き、このアンケートを行い、次年度はより詳しい考察をしたいと考えている。

２．アンケート調査結果と考察

＊実際のアンケート用紙記載事項

礼拝アンケート　　２０１６年前期実施

１．あなたはキリスト教信者ですか？　はい　　いいえ

２．あなたは教会に行ったことがありますか？
①一度も行ったことがない　　②一度だけ行った
③複数回行った　→　（　　）回行ったことがある

３．あなたは大学入学前に、キリスト教主義の学校に通いましたか？　はい　　いいえ
⇒　それは＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿の時。
★＿＿＿＿＿の中には幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校を入れる。

４．あなたはこの大学がキリスト教主義大学であることに対してどのようなイメージをお持ちですか？
キリスト教大学であることを＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿だと思う。
★＿＿＿＿＿の中にあなたのイメージについてお書きください。

5．礼拝について今、どんな風に感じていますか？
①　良い時間である。　②　時々、良いと感じる
③　なんとも感じない。　④　義務だから仕方がないと思っている

6．礼拝の時、自分で、祈ったことがありますか？（たとえば、家族のこと、自分のこと、熊本自身の被災地のこと、自分の国のこと……など）
①　よくある。　②　時々、祈る。　③　祈ったことがある　④　まったく祈らない

7．礼拝での讃美歌はどのように感じていますか？
①　心地よい　②　讃美歌をもってきているが歌えない。
③　讃美歌をもってきていないので歌えない　④　歌いたくない

8．礼拝での話はどうですか？
①　共感する　②　共感することもある　③　まったく聞かない

9．最後におたずねします。あなたの学科、学年、性別、日本人か留学生かを教えてください。
①学科
②学年
③性別
④国籍　留学生のみ出身国をお書きください　（　　）

❤　アンケート以上になります。ご協力、ありがとうございました！

(1)　人間社会学科

担当　金　　承子

問１．あなたはキリスト教信者ですか		No.	問１	問２	問２の２	問３	問３の２	問３の２その他	問４	問５	問６	問７	問８	問９①学科	問９②学年	問９③性別	問９④国籍	問９④その２
問１	はい→１　いいえ→２	1	2	1		2			自分の神だけで生々しくたにんの神まですうはいしている	2	3	1	1	4	1	2		
問２．あなたは教会に行ったことがありますか？		2	2	1		2			普通	2	4	1	2	4	1	2		
問２	①一度も行ったことがない→１	3	1	1		2			かみさまにしんじ	1	1	2	1	4	2	2	ベトナム	
	②一度だけ行った→２　③複数回行った→３	4	1	1		2			あんしん	1	1	2	1	4	1	2	ベトナム	
問２の２．複数回行った事がある場合の回数		5	2			2				1	1	1	1	4	1	1	ベトナム	
問２の２	記載があった回数をそのまま数字で記入	6	2	1		2			ほこり	4	4	1	2	4	1	2		
問３．あなたは大学入学前に、キリスト教主義の学校に通いましたか？		7	2	3	数え切れないほど		1	4,5	すてきなこと	1	1	1	1	4	1	1		
問３	はい→１　いいえ→２	8	2	1		2			キリストの環境	1	1	1	1	4	2	1	ベトナム	
問３の２．はいの場合、どの時か（複数回答可（２と５など）		9	2	1		2			かみさまがいったこととおり	1	2	2	1	4	1	1	ベトナム	
問３の２	幼稚園→１　保育園→２　小学校→３	10	2	3	2	2			素晴らしい	1	1	1	2	4	1	2		
	中学校→４　高校→５　その他の回答→６	11	2	1		2				3	4	2	2	4	1	1		
問３の２その他	その他の回答を、そのまま記入	12	1	2		2			ほこり	2	2	2	2	4	1	1		
問４．本学がキリスト教大学であることに対するイメージ		13	2	1		2			新しい考え方を知る場	2	3	1	2	4	1	1		
問４	記入された文字列をそのまま記入	14	1	3	何回も		1	3	すばらしい	1	1	1	2	4	1	1	ベトナム	
問５．礼拝について今、どんな風に感じていますか？		15	2	1		2			誇り	2	2	2	2	4	1	1		
問５	①～④に応じて１～４を記入	16	2	1		2			珍しい事	2	2	1	2	4	1	2	日本	
問６．礼拝時に自分で祈ったことの有無		17	2	1		2			何も感じない	4	3	4	2	4	1	1	日本	
問６	①～④に応じて１～４を記入	18	2	1		2			自由	4	2	3	2	4	1	1		
問７．礼拝での賛美歌に対する感じ		19	2	1		2			「へえ」	4	4	2	2	4	1	1		
問７	①～④に応じて１～４を記入	20	2	1		2				3	3	2	2	4	1	1		
問８．礼拝での話について		21	2	1		2			信仰がある	1	3	1	2	4	1	2	中国	
問８	①～③に応じて１～３を記入	22	2	1		2			いいこと	2	2	3	2	4	2	1	ベトナム	
問９①学科		23	2	1		2			親善	2	1	2	2	4	2	2	ベトナム	
問９①学科	現代コミュニケーション学科→１　食物学科→２	24	2	1		2		2	親善	1	2	1	2	4	2	2	ミャンマー	
	コミュニティ福祉学科→３　人間社会学科→４	25	2	1		2			不思議	3	3	4	2					
	（短大、四大毎に、五十音順）	26	2	3	?	2			素敵なこと	3	3	2	2	4	1	1		
問９②学年		27	2	1		2			かっこいい	3	4	4	3	4	1	2		
問９②学年	１年→１　２年→２　３年→３　４年→４	28	2	2		1		1,5	優雅	1	3	1	2	4	1	1		
問９③性別		29	2	3	高２から	1		5	ほこり	1	1	1	1	4	1	1		
問９③性別	女性→１　男性→２　（五十音順）	30	2	1	2					2	3	2	2	4	1	2		
問９④国籍		31	2	3	５回以上	2				4	3	4	3	4	1	2		
問９④国籍	記載のまま記入	32	2	1	2				宗教を学べるいい場	2	4	2	2	4	1	1		
問９④その２　出身国（留学生のみ）		33	2	1	2				かっこいい	2	2	2	2	4	1	2	日本	
問９④その２	記載のまま記入	34	2	1	2				素敵	2	3	4	2	4	1	1		
		35	2	2		2			ない	2	2	1	1	4	2	2		
		36	なし	3	3,4	2			なんとも思わない	2	4	4	2	4	1	1		
		37	2	2		2			とても生徒想い	1	1	1	2	4	1	2		
		38	2	1		2			かっこいい	3	2	2	2	4	1	2		
		39	1	3	2	2				2	2	2	2					
		40	2	1		2			特にどうも思わない	3	2	4	3	4	1	2		
		41	2	1		2				3	4	4	2	4	1	2		
		42	2	2		2				2	3	1	2	4	1	1	日本	
		43	2	3	約50	1		4,5	素敵（特に、クリスマス）	3	1	1	2	4	1	1		
		44	2	1		2			穏やかなイメージ	2	3	2	2	4	1	2		
		45	2	1		2			アーメン	3	4	4	3	4	1	2		
		46	2	2		2			特に、特別だとは思わない	1	2	1	2	4	1	2		
		47	2	1		2				3	4	1	2	4	1	2	中国	
		48	2	1		2				2	4	3	2	4	1	2	中国	
		49	2	3	2,3	2			キリスト教の考え方を学ぶには良い場所	2	3	1	2	4	1	1		
		50	2	2		2			何も思いません	2	3	2	2	4	1	1		
		51	1	3	4	1	2	日本語学校に通っていた時	良いこと	1	2	1	2	4	1	1	ミャンマー	
		52	2	1		2				4	4	1	2	4	1	2	日本	
		53	2	1		2				4	2	3	2	4	1	1	留学生	
		54	2	1		2				2	2	2	2					
		55	2	1		2			今まで関わったことのないことを体験させてくれる	2	4	2	2	4	1	1	日本	
		56	2	2		2				2	3	1	2	4	2	2	中国	
		57	2	1		2			とくになんとも	3	3	3	2	4	1	1		
		58	2	1		2				2	3	2	2	4	1	1		
		59	2	1		2				1	1	1	1	4	1	1		
		60	2	2		2				3	2	4	3	4	1	1	中国	
		61	2															
		62	2	1		2			１つの良い経験ができる場所	1	2	1	2	4	1	1		
		63	なし	1		2				2	3	2	2	4	1	1		
		64	2	1		2				2	3	1	2	4	1	2		
		65	2	1		2				3	4	4	3					
		66	1	2		2				1	1	1	2				ベトナム	
		67	2	3		2				2	2	2	2	4	1	2		
		68	2	1		2			特に意識するものではないこと	2	3	5	2	4	1	2		
		69	2	1		2			異なる価値感を知れる	2	4		2	4	1	2		
		70	2	1		2			なんとも思っていない	4	4	4	3	4	1	2		
		71	1	3		2			いいと思うが、千仏教を教えてることに不快感がある	2	2	2	2	4	1	2	日本	
		72	2	3		1		4,5		2	2	1	2	4	1			
		73	2	1		2				3	2	3	2	4	1	1	日本	
		74	1	1		1		5	ほこり	1	2	1	2	4	1	2		
		75	2	1		2			どうでもいい	3	3	1	2	4	1	1		
		76	2	1		2			ほこり	5	3	1	2	4	1	1		
		77	2	1		2			普通	4	4	4	3	4	1	1		
		78	1	1		2			嬉しいこと	4	3	4	2	4	1	2		
		79	2	3	4	2			なんとも	1	3	1	1	4	1	2	日本	
		80	2	1		2				2	1	1	1	4	1	2		

≪アンケート結果によるコメント≫

人間社会学部　人間社会学科の学生 80 人が答えた「礼拝アンケート」の結果、印象に残ったのは以下の通りである。

【質問 1 】あなたはキリスト教信者ですか？

「はい」と答えた学生は、10 名（12.5%）。この中で 5 名が留学生である。

「いいえ」と答えた学生は、68 名（85%）。

「返答なし」の学生は、2 名（2.5%）。

【質問 2】あなたは教会に行ったことがありますか？に対する質問に対して印象に残ったのは、【質問 1 】との関連性を考えると「信者」であると答えたにも関わらず、「一度も行ったことがない」と答えた学生が 4 人もおり、その中での 2 人はベトナム出身の留学生である。「一度だけ行った」と答えた学生は 2 人、その中での 1 人もベトナム出身の留学生である。不思議な返答である。どういう状況であるのかを知りたい。

【質問 4】キリスト教大学であることを_____だと思う。この質問に対する答えの結果、41 名は、良い好感を持っている　51.25%

10 名は、普通（12.5%）。

26 名は、空欄（32.5%）。

3 名は、否定的（3.75%）。

【質問 6】礼拝の時、自分で、祈ったことがありますか？この質問に対する答えの結果、17 名（21.3%）だけがまったく祈らないと答えている。ということは、63 名（78.7%）は何回か祈ったことがあるということになる。

≪総評≫

世界的にキリスト教徒の数は減少傾向にあるようである。今回の本学の【質問 1】の結果を見ても分かるように、全体の応答者の中でキリスト教の信者でない学生は 85%である。宗教に関心がないか、或いは他の宗教を持っているかを推測できる。

しかしながら、今回本学の「礼拝アンケート」の結果、【質問 4 】と【質問 6】で示しているように、51.25%の学生がよい好感度を持っており、78.7%の学生が何回かは祈ったことになる。大変喜ばしい結果であると言える。

宗教の理念がどのようなものであれ人間は決して宗教的な背景を越すことはできない。それは信仰上の有無神論を問わず、現実的に存在しているすべての人間の生活は何かしら宗教的欲求と無意識のうちに結合されているからである。 このような人間生活と宗教との関係を通察する時、一番旺盛な自我形成期におかれている大学生のための宗教教育の問題は信仰以前の重要な意味を持っていると思われる。

(2)　コミュニティ福祉学科　　担当　中原　陽三

問１．あなたはキリスト教信者ですか		No.	問１	問２	問２の２	問３	問３の２	問３の２その他	問４	問５	問６	問７	問８	問９①学科	問９②学年	問９③性別	問９④国籍	問９④その２
問１	ほい→１　いいえ→２	1	2	1		2			どうでもいい	3	3	4	3	3	1	2		
問２．あなたは教会に行ったことがありますか？		2	2	1		1	5		すばらしいこと	3	3	4	3	3	1	2	日本	
問２	①一度も行ったことがない→１	3	2	1		2			きびしいところ	3	4	3	2	3	1	2	日本人	
	②一度だけ行った→２　③複数回行った→３	4	2	1		2			良いこと	3	4	1	2	3	1	2	日本人	
問２の２．　複数回行った事がある場合の回数		5	2	1		2			良心的	1	2	1	2	3	1	2		
問２の２	記載があった回数をそのまま数字で記入	6	2	1		2				3	3	1	2	3	1	1		
問３．あなたは大学入学前に、キリスト教主義の学校に通いましたか？		7	2	1		2				3	3	3	2	3	1	1		
問３	ほい→１　いいえ→２	8	2	1		2			魅力	1	3	1	2	3	1	1		
問３の２．はいの場合、どの時か（複数回答可（２と５など）		9	2	3	たくさん	1	1		めっちゃいい	2	2	2	2	3	1	1		
問３の２	幼稚園→１　保育園→２　小学校→３	10	2	1		2				2	4	1	2	3	1	1		中国
	中学校→４　高校→５　その他の回答→６	11	2	1		2			どうも思わない	4	4	4	3	3	1	2		
問３の２その他	その他の回答を、そのまま記入	12	2	1		2			なぜ、不思議	3	3	1	2	3	1	1		
問４．本学がキリスト教大学であることに対するイメージ		13	2	1		2			一つの緑	4	3	1	2	3	1	1		
問４	記入された文字列をそのまま記入	14	2	1		2			いいこと	4	4	3	3	3	1	1		
問５．礼拝について今、どんな風に感じていますか？		15		1		2			すごいこと	4	2	3	2	3	1	1		
問５	①～④に応じて１～４を記入	16	2	1		1	1		静かな時間	3	3	2	2	3	1	1		
問６．礼拝時に自分で祈ったことの有無		17	2	1		2			こわい	3	4	3	3	3	1	1		
問６	①～④に応じて１～４を記入	18	2	1		1	5		いいこと	3	2	2	2	3	1	2		
問７．礼拝での賛美歌に対する感じ		19	2	1		2				3	3	2	2	3	1	2		
問７	①～④に応じて１～４を記入	20	2	3	2	2			「神さま」は、自分にとって大きな存在だということを感じさせるような機会がある	2	2	1	2	3	1	1		
問８．礼拝での話について		21	2	1		2				4	4	4	2	3	1	1		
問８	①～③に応じて１～３を記入	22	2	1		1	5		良いこと	1	2	1	1	3	1	1	日本	
問９①学科		23	2	1		2			素敵	3	2	1	2	3	1	1	日本	
問９①学科	現代コミュニケーション学科→１　食物学科→２	24		1		2				4	4	4	3	3	1	1		
	コミュニティ福祉学科→３　人間社会学科→４	25	2	1		2			個性的	2	3	2	2	3	1	2	日本人	
	（短大、四大毎に、五十音順）	26	2	1		2			まぁ良い	3	4	2	3	3	1	1	日本人	
問９②学年		27	2	3	たくさん	1	2		すてき	1	1	1	2	3	1	1		
問９②学年	１年→１　２年→２　３年→３　４年→４	28		1		2												
問９③性別		29	2	1		2			珍しいこと	3	3	2	2	3	1	2		
問９③性別	女性→１　男性→２　（五十音順）	30	2	2		2			まあまあ良い	3	4	2	2	3	1	1	日本人	
問９④国籍		31	1	3	15	2			良い	1	1	1	1					
問９④国籍	記載のまま記入	32	2	1		2			大変だなあ	4	4	3	2	3	1	1		
問９④その２　出身国（留学生のみ）		33	2	1		2			いいこと	2	2	2		3	1	1		
問９④その２	記載のまま記入	34	1	3	15	2			ほこりに思う事	2	2	2	2	3	1	2	ジャパン	
		35	2	2		2				4	4	3	3	3	1	1		
		36	2	3	3	1		中・高両方	すばらしい	1	1	1	1	3	1	1		
		37	2	1		2			ふつうに良い	2	4	2	2	3	1	1		
		38	2	1		2			怖いと	4	4	3	3	3	1	1		
		39	2	1		2			不思議な所	3	4	2	2	3	1	1		
		40	2	1		2			すてきなこと	4	2	4	3	3	1	1		
		41	2	2		1	5		ステキ	1	2	1	2	3	1	1		
		42	2	1		2			キリスト教に関われるいい機会	1	3	1	1	3	1	1		
		43	2	1		2				3	4	2	2	3	1	1		
		44		1		2			誇り	2	2	1	2	3	1	1		
		45	2	2		2			いいこと	3	3	3	2	3	1	1		
		46	2	1		2				4	3	2	2	3	1	2		

注１：　アンケートの通し番号について
各教員へ担当学科のアンケートが配布されている。入力前にそのアンケートへ通し番号を振っておく（アンケートの右上隅に手書き）
注２．仮１～仮４は実際に回答されたアンケート用紙だが、各教員へ配布されたアンケートには入っていない。このうちの担当学科学生のアンケート（１枚）については、通し番号を最後として入力（コピー）するようお願いします。

注①：No.4 の回答において、問７で、心地よいのあとに、「のもある」と手書きがある。
注②：左下欄の「注１」、「注２」は、アンケートデータ入力者（コメント担当者に同じ）のそれぞれに対する入力上の注意点である。

コミュニティ福祉学科１年生のアンケート結果へのコメント

2016年度宗教委員会アンケートへの回答（コミュニティ福祉学科１年生分）に対する中原コメント（回答から読み取った特徴についてのざっとしたコメント）を、次の１～１５に示す；

1．コミュニティ福祉学科2016年度１年生中、46名（女性名32、男性12名、性別不明２名）の回答。
2．キリスト者２名（１名は男性、１名は性別不明（未回答））。
3．留学生は１名。
4．教会に行ったことがない者36名　１度だけ行った者４名、複数回行った者６名（「たくさん」２名、「15回」２名（２名のキリスト者を含む）、「3回」１名、「2回」１名）。
5．キリスト教主義の学校へ通った者 ８名（中高１名、高校４名、幼稚園２名、保育園１名）、通わなかった者38名（２名のキリスト者を含む）。
6．問４への回答者36名、未回答10名（未回答者は、すべてキリスト教主義の学科へ通っていない者で、さらに、このうち教会に１回行った者１名以外の９名は、教会に行ったことがない）。
問４への回答の内訳は次のとおり；
ａ．肯定的（すばらしいこと、良いこと、良心的、魅力、めっちゃいいなど）24名
ｉ．24名には、「教会に行ったことがあるか、キリスト主義学校に通ったことがある者」（問４の回答者36名中13名（回答者46名中なら14名））のうち、１名（教会へは行ったことがないが、幼稚園でキリスト教主義学校へ幼稚園のとき通っていた者）を除いた12名（問４の回答者36名中）を含んでいる。
ｂ．中間あるいは不明（珍しいこと、どうでもいい、どうも思わない、「なぞ、不思議」、不思議な所、一つの緑（縁のまちがいか不明）、きびしいところ、静かな時間、個性的）９名。
ｉ．９名はすべて、教会に行ったことがない人。さらに、うち１名以外は、キリスト教主義学校に通ったことがない者。
ｃ．否定的（こわい、怖いと、大変だなあ）３名。
ｉ．３名はすべて、キリスト教主義の学科へ通っていない者で、かつ、教会に行ったことがない人。
7．問５（45名／46名　回答）。
ａ．１．８名（全員、問４に肯定的回答）、２．８名（１名は問４に未回答だが、７名は肯定的回答）、３．18名、４．11名、５．空白　１名。
8．問６（45名／46名　回答）。
ａ．１．３名（全員、問４に肯定的回答）、２．12名（全員、問４に肯定的回答）、３．14名（問４へ肯定的、中間、空白のいずれか）、４．16名（問４へは肯定的、中間、否定的、空白のいずれか）、５．空白　１名。
9．問７（45名／46名　回答）。
ａ．１．16名（問４に肯定的回答が多いが中間と空白（未回答）もある）、２．14名（問４へ肯定的、中間、空白）、３．９名（問４への回答は４種混在）、４．６名、５．空白　１名。
10．問８（44名／46名　回答）。
ａ．１．４名（すべて問４に肯定的回答）、２．30名（問４へ肯定的、中間、空白）、３．10名（問４への回答は４種混在）、４．空白　２名。
11．問４へ回答した36名のうち、「教会へもいったことがなく、キリスト教主義の学校へも通っていなかった者」は、23名（36－13（この13は上記６ａｉより））だが、このうち肯定的回答した者は12名、中間あるいは不明は８名、否定的回答は３名。
12．問４へ回答した36名の３分の２が、キリスト教大学であることに対して肯定的なイメージを

持っている（上記 6a より）。この 36 名中の、「教会へもいったことがなく、キリスト教主義の学校へも通っていなかった者」23 名についても、半分以上の 12 名が肯定的なイメージを持っている（上記 11 より）。

13. アンケート回答者 46 名中、34 名は、礼拝でのお話に共感あるいは共感することもあると回答しており（上記 10）、アンケート回答者の 7 割以上である。
14. アンケート回答者 46 名中、礼拝での賛美歌について、歌いたくないと答えたか未回答の者は 7 名であり（上記 9 ）、約 85％の 39 名もの者が、「歌いたくないわけではない」ことがわかる。
15. アンケート回答者 46 名中、礼拝のとき自分で祈ることにつき、「まったく祈らないか、この回答に未回答の者」は、17 名であり（上記 8 ）、6 割以上にあたる 29 名の者が、「自分で全く祈らないわけではなかった」ことがわかる。

(3)　現代コミュニケーション学科　　担当　山田美代子

問１．あなたはキリスト教信者ですか		No.	問１	問２	問２の２	問３	問３の２	問３の２その他	問４	問５	問６	問７	問８	問９①学科	問９②学年	問９③性別	問９④国籍	問９④その２
問１	はい→１　いいえ→２	1	2	1		2				1	1	1	1	1	1	1	ベトナム	
問２．あなたは教会に行ったことがありますか？		2	2	2		2			ステキな学校	1	2	2	1	1	1	1		
問２	①一度も行ったことがない→１	3	2	2		2			儀式	1	1	1	1	1	1	1	ベトナム	
	②一度だけ行った→２　③複数回行った→３	4	2	1		2			いいこと	2	1	1	1	1	1	1		
問２の２．　複数回行った事がある場合の回数		5	2	1						1	1	1	1	1	1	1	日本	
問２の２	記載があった回数をそのまま数字で記入	6	1	1		2				1	4	2	2	1	1	1		
問３．あなたは大学入学前に、キリスト教主義の学校に通いましたか？		7		2		2				2	2	2	2	1	2	2	ネパール	
問３	はい→１　いいえ→２	8	2	1		2				3	4	1	2	1	1	1		
問３の２．はいの場合、どの時か（複数回答可（２と５など）		9	2	1		2				2	4	3	2	1	1	1	日本人	
問３の２	幼稚園→１　保育園→２　小学校→３	10	2	1		2			神秘的	4	2	2	2	1	1	1		
	中学校→４　高校→５　その他の回答→６	11	2	1		2			ふつう	4	2	3	2	1	1	1		
問３の２その他	その他の回答を、そのまま記入	12	2	1		2				4	4	2	2	1	1	1		
問４．本学がキリスト教大学であることに対するイメージ		13	2	1		2			初めてだからしらないことだらけ	4	2	1	2	1	1	1		
問４	記入された文字列をそのまま記入	14	2	1		2				3	4	4	2	1	1	1		
問５．礼拝について今、どんな風に感じていますか？		15	1	2		2				4	3	4	2					
問５	①～④に応じて１～４を記入	16	2	1		2			いいこと	2	2	3	2	1	1	1	ベトナム	
問６．礼拝時に自分で祈ったことの有無		17																
問６	①～④に応じて１～４を記入	18	2	1		2			めずらしい	4	3	2	2	1	1	1		
問７．礼拝での賛美歌に対する感じ		19	2	1		2				2	2	2	2	1	1	1		
問７	①～④に応じて１～４を記入	20	2	1		2			すばらしいこと	2	2	3	2	1	1	1		
問８．礼拝での話について		21	2	2		2			ほこり	2	2	2	2	1	1	1		
問８	①～③に応じて１～３を記入	22	2	1		2			何も思わない	3	3	3	2	1	1	1		
問９①学科		23	2	1		2			不思議	4	2	3	3	1	1	1	日本	
問９①学科	現代コミュニケーション学科→１　食物学科→２	24	2	1		2			特に何も	3	3	2	2	1	1	1		
	コミュニティ福祉学科→３　人間社会学科→４	25	2	1		2			とくになんとも	3	3	3	2					
	（短大、四大毎に、五十音順）	26	2	1		2			変わっている	3	4	2	2	1	1	1		
問９②学年		27	2	1		2			清らか	2	2	2	2	1	1	1		
問９②学年	１年→１　２年→２　３年→３　４年→４	28	2	1		2				4	3	2	2	1	1	1		
問９③性別		29	2	2		2			嬉しいこと	4	3	4	2	1	1	2	ネパール	
問９③性別	女性→１　男性→２　（五十音順）	30	2	1		2			めずらしいこと	3	4	2	2	1	1	1		
問９④国籍		31	1	1		2			すてき	3	3	3	2	1	1	1		
問９④国籍	記載のまま記入	32	1	3	5	2			誇り	1	1	1	1	1	1	1		
問９④その２　出身国（留学生のみ）		33	1	3	100	1				4	3	2	3				Japan	
問９④その２	記載のまま記入	34	2	1		2			いい	4	3	3	2	1	1	1		
注１：　アンケートの通し番号について		35		1		2				2	2	1	2	1	1	1		
各教員へ担当学科のアンケートが配布されている。人力前にそのア		36	2	1		2			神聖な場所	3	3	4	2	1	1	1		
ンケートへ通し番号を振っておく（アンケートの右上隅に手書き）		37	2	1		2			変わってる	3	4	4	2	1	1	1	日本	
注２．仮１～仮４は実際に回答されたアンケート用紙だが、各教員へ		38	1	3	5	1	5			4	2	4	3	1	1	1		
配布されたアンケートには入っていない。このうちの担当学科学生		39	2	1		2			いいこと	1	3	1	1	1	1	1	日本	
のアンケート（１枚）については、通し番号を最後として入力（コ		40		1		1	1			2	2	2	2	1	1	1		
ピー）するようお願いします。		41	2	1		2				3	4	4	3	1	1	1		
		42	2	2		2			きそくがきびしい学校	3	3	3	2	1	1	1	日本人	
		43	2	2		2			良い	2	2	2	2	1	1	1		
		44	2	1		2			すごいこと	2	4	1	2	1	1	1		
		45	2	1		2			規則がきびしそう	1	3	1	2	1	1	1	日本人	
		46	2	1		2				2	4	3	2	1	1	1		
		47	2	1		2			自分とは違う価値観、考えを知れる	2	3	1	2	1	1	1		
		48	2	2		2			ふしぎ	3	4	1	2	1	1	1		
		49	2	1		2			いいこと	2	2	1	2	1	1	1	日本	
		50	2	1		2			ステキ	2	2	2	2	1	1	1		
		51	2	2		2				3	4	4	2					
		52	2	1		1	5			2	3	2	2	1	1	1		
		53	2	1		2			おもしろい	4	4	2	2	1	1	1		
		54	2	1		2			すばらしいこと	1	2	1	2	1	1	1		
		55				2				4	3	2	2	1	1	1		
		56	2	1		2			別に	4	4		2		1	1		
		57	1	3	結構行った	2			ほこり	1	1	1	1	1	1	2		
		58	2	2		2			めずらしい	3	4	2	2					
		59	2	1		2			厳しそう	2	3	1	2	1	1	1	日本人	
		60	1	3	5	1		国にいる時		2	4	4	2	1				
		61	2	1		2			おもしろい	3	4	3	3	1	1	1	日本	
		62	2	1		2			何も思わない	4	4	4	2	1	1	1		
		63	2	1		2			面倒	3	4	4	3	1	1	1		
		64	1	3		1	1		良いこと	2	2	2	1	1	1	2	日本人	
		65	2	1		2				2	2	2	2	1	2	1	ミャンマー	
		66	2	1		2			いいこと	3	1	1	1	ヒミツです	1	♀（1）		
		67	2	1		2				3	4	2	2	1	1	1	日本人	
		68	2	1		2			キリスト教の学校だなあ	4	4	2	2	1	1	1		
		69	2	1		2			珍しい	2	1	2	1	1	2	1		

⑷　食物学科　　担当　崔　　瑛

問１．あなたはキリスト教信者ですか		No.	問１	問２	問２の２	問３	問３の２	問３の２その他	問４	問５	問６	問７	問８	問９①学科	問９②学年	問９③性別	問９④国籍	問９④その２
問１	はい→１　いいえ→２	仮１	2	1		2				4	3	2	2	3	1	2		
問２．あなたは教会に行ったことがありますか？		仮２	2	1		2			いいんじゃないか	2	2	2	2	4	1	2		
問２	①一度も行ったことがない→１	仮３	2	2		2			外国風	1	2	3	2	2	1	1	日本	
	②一度だけ行った→２　③複数回行った→３	仮４	2	2		2			ステキ	4	2	2	2	1	1	1		
問２の２，　複数回行った事がある場合の回数		1	2	1		2			良い大学	1	2	1	1	2	1	1		
問２の２	記載があった回数をそのまま数字で記入	2	2	1		2				3	2	2	2	2	1	1		
問３．あなたは大学入学前に、キリスト教主義の学校に通いましたか？		3	1	2		1	5		きびしい	3	2	2	2					
問３	はい→１　いいえ→２	4	2	1		2			すごいこと	1	2	1	2	2	1	1		
問３の２，はいの場合、どの時か（複数回答可（２と５など）		5	2	1		2				2	2	3	1	2	1	1		
問３の２	幼稚園→１　保育園→２　小学校→３	6	2	1		2			少し変わっていると思う	2	3	2	2	2	1	1		
	中学校→４　高校→５　その他の回答→６	7	2	2		2			キリスト教を大切にしているの	1	3	1	2	2	1	1		
問３の２その他	その他の回答を、そのまま記入	8	2	1		2			かわっている	3	3	3	2	2	1	1		
問４．本学がキリスト教大学であることに対するイメージ		9	2	1		2			特に何も思っていない	3	3	2	2	2	1	1		
問４	記入された文字列をそのまま記入	10	2	1		2			歴史が長い	3	2	2	2	2	1	1		
問５．礼拝について今、どんな風に感じていますか？		11	2	1		2				1	2	2	2	2	1	1		
問５	①～④に応じて１～４を記入	12	2	1		1	5		めんどくさい	1	3	1	2	2	1	1		
問６．礼拝時に自分で祈ったことの有無		13	2	1		2			変わった学校	3	3	2	2	2	1	1		
問６	①～④に応じて１～４を記入	14	1	1		2			良い学校	1	1	2	2	2	1	1		
問７．礼拝での賛美歌に対する感じ		15	2	1		2				2	2	2	2	2	1	1		
問７	①～④に応じて１～４を記入	16	1	3	いろいろ	2			よい	2	2	2	2	1	1	2	留学生	
問８．礼拝での話について		17	2	1		2			独特	3	4	3	2	2	1	1		
問８	①～③に応じて１～３を記入	18	2	2		2			良いこと	1	2	2	1	2	1	1		
問９①学科		19	2	1		2			いい	1	1	2	1	2	1	1		
問９①学科	現代コミュニケーション学科→１　食物学科→２	20	2	1		2				1	4	2	2	2	1	1		
	コミュニティ福祉学科→３　人間社会学科→４	21	2	3	30	1	4,5		神聖	1	2	1	2	2	1	1		
	（短大、四大毎に、五十音順）	22	2	1		2			少しほこり	2	2	1	2	2	1	1		
問９②学年		23	2	2		2			珍しい	2	3	2	2					
問９②学年	１年→１　２年→２　３年→３　４年→４	24	2	1		2				2	3	2	2	2	1	1		
問９③性別		25	2	1		2			めずらしい	3	4	2	2	2	1	1		
問９③性別	女性→１　男性→２（五十音順）	26	2	3	友達の家が教会でよく遊びに行ってた	2			とてもいいなと	2	3	1	2	2	1	1		
問９④国籍		27	2	2		2				3	4	3	2	2	1	1		
問９④国籍	記載のまま記入	28	2	1		2			アーメン	3	4	2	2	2	1	1		
問９④その２　出身国（留学生のみ）		29	2	1		2			めずらしいと	2		3	2	2	1	1		
問９④その２	記載のまま記入	30	2	1		2				1	1	1	1	2	1	1		
		31	1	2		2			すてき	2	4	2	2	2	1	1		
		32	1	3		1	1,5		何とも思わない	3	3	2	2	2	1	1		
		33	2	1		2				4	3	3	2					
		34	2	1		2			いいこと	1	2	2	1	2	1	1		
		35	2	1		2				2	3	2	2	2	1	1		
		36	2	1		2				3	4	2	2	2	1	1		
		37	2	1		2			いい	2	2	2	2	2	1	1		
		38	2	3	2	2			神聖な場所	1	4	2	1	2	1	1		
		39	2	1		2			良いこと	3	3	2	1	2	1	1		
		40	2	1		2			（被災地を祈ったり…）良いこと	2	3	2	2	2	1	1		
		41	2	1		2			あまり興味がない	1	2	2	2	2	1	1		
		42	2	1		2			面白い学校	1	3	1	2	2	1	1		
		43	2	1					仏教ではない	2	4	1	2	2	1	1		
		44	2	1		2			考えたことなかったです。	3	4	2	2	2	1	1		
		45	2	2		2			不思議	3	2	2	2	2	1	1		
		46	2	1		2			すごいこと	2	3	2	2	2	1	2		
		47	2	1		2			めずらしい	2	3	2	2	2	1	1		
		48		1		2			良いこと	2	4	2	2	2	1	1		
		49	2	2		2			すてき	1	4	2	2	2	1	1		
		50	2	1		2			キリスト教を信じている学校	2	3	2		2	1	1		
		51	2	1		2			どっちでもいいこと	3	3	4	2	2	1	1		
		52	2	1		2			何とも思わない	3	3	2	2	2	1	1		
		53	2	2		2			誇りに感じている学校	2	3	1	2	2	1	1		
		54	2	1		2				3	3	2	2	2	1	1		
		55	2	1		2				3	4	2	2	2	1	1		
		56	2	1		2			おどろき	1	4	1	2	2	1	1		
		57	2	1		2			めずらしい	3	3	2	2	2	1	2		
		58	2	2		2			不思議	2	2	2	2	2	1	2		
		59		1		2			いい	2	3	1	2	2	1	1		
		60	2	1		2			いいこと	1	2	1	2	2	1	1	日本	
		61	2	1		2				3	2	2	2	2	1	1		
		62	2	1		2			誇り	1	1	2	2	2	1	1		
		63	2	1		1	1		普通	3	3	2	2	2	1	1		
		64	2	2		2			いい経験	2	2	1	2	2	1	1	日本人だぞ！	
		65	2	1		2				2	3	3	2	2	1	1		

注１：　アンケートの通し番号について
各教員へ担当学科のアンケートが配布されている。人力前にそのアンケートへ通し番号を振っておく（アンケートの右上隅に手書き）
注２．仮１～仮４は実際に回答されたアンケート用紙だが、各教員へ配布されたアンケートには入っていない。このうちの担当学科学生のアンケート（１枚）については、通し番号を最後として入力（コピー）するようお願いします。

人間社会学科　崔　瑛

食物学科　65 名　＜アンケート結果に対するコメント＞

短期大学食物学科の学生 65 人が答えたアンケート調査の結果を以下にまとめる。

１．キリスト教信者の割合

キリスト教信者の学生は少数である。全 65 名のうち、5 名のみ「信者である」と答えた。

2. 教会に行った経験

教会に行ったことがあるかの質問については、「行ったことがない」が 49 名、「行ったことがある」が 11 名、「複数回行ったことがある」が 5 名であった。信者ではないが、教会に行った経験のある学生が少数ではあるがいた。

３．入学前にキリスト教主義学校に通った経験

キリスト教主義学校に通った経験のある学生は 5 名で、そのうち 2 名が「信者である」と答えた学生であった。

４．どの時期、キリスト教主義の学校に通ったか

複数回答で、高校（4 名）、幼稚園（2 名）、中学校（1 名）と答えており、そのうち、「中学校と高校」が 1 名、「幼稚園と高校」が 1 名であった。

5. キリスト教主義大学に対するイメージ

キリスト教主義大学に対するイメージを自由記述で回答してもらった結果、最も多く書かれたのは、「よい」、「いいと思う」、「とてもいいこと」などであり、14 名からポジティブな回答を得た。その他、「変わっている」、「珍しい」、「独特」という意見があわせて 13 名であり、キリスト教主義大学であることに珍しさや個性を感じる学生も多くいた。

その他、「神聖」、「キリスト教を大事にしている」、「誇りに思う」、「すごい」、「すてきである」等のコメントが書かれており、信者ではない学生でもキリスト教主義大学に対するイメージは肯定的であった。少数意見として、「何も思わない」、「興味がない」等もあった。

コメント内容	度数
よい、いい	14
変わっている	6
珍しい、独特	7
神聖、キリスト教大事	3
誇り	3
すごい	2
すてき	2
歴史がある	1

6. 礼拝に対する感じ方

20 名の学生が礼拝に対して「良い時間である」と答え、24 名の学生が「時々良いと感じる」と答えた。

7. 礼拝で祈ったことがあるか

「全く祈ったこと」がないと答えた学生が 14 名であり、その他の学生は祈った経験があると答えた。

8. 礼拝で賛美歌を歌うか

賛美歌について「心地よい」と答えた学生は 15 名である。一方、「賛美歌を持参しているが歌えない」学生が 42 名であり、賛美歌をよく知らない等の理由で、歌えない学生が多いことが分かる。

9. 礼拝の話

礼拝の話について、「共感する」と答えた学生が 8 名、「共感することもある」と答えた学生が 56 名であった。礼拝のテーマは毎週異なるため、学生自身にとって興味のある内容には、共感をおぼえるという結果であると推測できる。

10. まとめ

キリスト教信者の学生は少数であり、教会に行った経験やキリスト教主義の学校に通ったことのある学生は少ないが、多くの学生がキリスト教主義大学に対する肯定的なイメージを持っていることが明らかになった。また、キリスト教主義に基づく教育は、本学の個性や特徴として、学生達に印象付けられていた。

礼拝の時間や賛美歌に対しては、義務だから仕方なく参加する等の意見はほとんどなく、良い時間として心地よく過ごしていることが分かった。礼拝に対する意見を参考にしながら、今後の学生らのキリスト教や宗教、礼拝に対する考え方の変化等、学生の心に及ぼすキリスト教関連の環境や行事の影響等を観察していく必要がある。

柴田敏学長へのインタビュー

２０１６年４月から静岡英和学院大学学長、院長に就任された柴田敏先生に、キリスト教を縦軸に、大学を横軸にして、先生の今の思いを語っていただきました。

＊柴田敏学長・院長の思い

聞き手　伊勢田奈緒

伊勢田

「今日は、学長にキリスト教と大学について色々、伺いたいと思います。よろしくお願いします。忘れるといけないので……先ず、先生のお好きな聖書箇所と讃美歌を教えていただけますか？」

柴田学長

「そうですね、好きな聖書箇所は色々ありますが……、マルコによる福音書 10 章 13 節～ 16 節 [1] ですね。それから……好きな讃美歌も色々ありますが、一編の 240 番ですね。」

伊勢田

「そうなんですね……わかります……私もたくさんありますし、好きな聖書箇所も、讃美歌も、その時、その時で変わっているように思いますし……増えたりもします……」

伊勢田

「それでは、学長が静岡英和学院大学へ来られたきっかけを教えていただけますか？」

柴田学長

「実は……私は静岡には全く、縁がありませんでした。ただ、静岡英和女学院短期大学 [2] で国文学科に欠員があったために応募して、それで 1990 年に静岡に来ました。」

伊勢田

「そうでしたか。……そういえば、私が来た頃、東静岡駅周辺はマンション群が立ち並ぶ今の姿ではなく、あるのはグランシップだけでとても見晴らしが良かったです。初めて大学へ行くバスのことを駅周辺でゲートボールをしていたおば様たちに尋ねたのを覚えておりますが……のんびりしていて、そして、なんにもありませんでした。」

柴田学長

「私が来たときは、東静岡駅すら、ありませんでした……。」

伊勢田

「まあ、そうでしたか。……それでは先生とキリスト教との出会いを教えてください。」

柴田学長

「キリスト教との出会いは大学のチャペルで、です。赴任してきた最初に言われたことは、『できるだけ、チャペルに出てください』でした。ですから、大学のチャペルに出たのがキリスト教との初めての出会いなのです。……私はそれまで……小学校から大学までまったく、キリスト教と関係のない世界にいました。ずっと、公立、国立だったので、本当に出会いはありませんでした。ただ、岩波文庫の『創世記』を少し、読んだことはありますが……それくらいでして。」

伊勢田

「まあ！……それでは、学長はいつ洗礼を受けられクリスチャンになられたのでしょうか？」

柴田学長

「……当時はチャペルに外部からお話に来てもらうということもあって、牧師さんや信

---

[1] マルコによる福音書 10 章 13 ～ 16 節「イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。『子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり行っておく。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることは出来ない。』そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。」

[2] 当時は短期大学のみ。2002 年に大学が開学。

徒の方たちのお話を聞く機会が多く、その方々のお話を不思議な話だと思いながら聞いておりました……そして、結婚することになって教会[3]へも行くようになりました。私の妻がクリスチャンで、結婚の条件として、教会へ通うことというのがありまして……。」

伊勢田

「まあ、そうでしたか……そして、それから……どうなったのでしょう？」

柴田学長

「1993年に結婚しまして、教会へ日曜日ごとに通うようになり、1997年に信仰告白して洗礼を受けました。結構、洗礼に至るまで時間がかかりましたが……。」

伊勢田

「先生、そうしてクリスチャンになられたのですね。……では、次に大学のチャペルへの思いがございますか？」

柴田学長

「チャペルの時間は大切ですね。大学の礼拝の時に、建学の理念が述べられるということですから。」

伊勢田

「それでも、なかなか、大学では教職員がチャペルに出るということが難しい……ようで……なんとか、来ていただけたらと思っていますが。クリスマス礼拝とかも……。」

柴田学長

「ぜひ、出ていただきたいですね。」

伊勢田

「それでは、今までのところでダブってしまうかもしれませんが、静岡英和学院大学と建学の精神についてお話しください。」

柴田学長

「建学の理念があっての静岡英和学院大学ですから、本当にこれは何があっても、しっかりと中心になければなりませんね。」

伊勢田

「その通りだと思います。静岡英和学院大学の教職員、学生だれもが、英和大は『愛と奉仕の精神を大事にしている大学だ』と言いますが、その意味を本当に知って、それを自然に行動できるような……人となって、大学から外へ、その精神を発信していってもらえたら……思っていますが……。さて、それでは大学でのキリスト教に関する行事をどのようにお考えでしょうか？」

柴田学長

「良いことだと思います……。伊勢田先生がイースター礼拝では、イースターエッグを配布したり、また、クリスマス行事も盛んにされて、良いことだと思います。キリスト教行事を行うことによって、一人一人がキリストの福音をもっと身近に感じて、理解するのに役立っていることだと思いますし、その具現化によって結局、一人一人に福音が伝えられていることになると思います。たとえば、ISEDA劇団[4]の劇を一緒に見ることによって、「感じる」心を養っているとも思いますし……。」

伊勢田

「特にクリスマス行事は、毎年、協力してくれる学生がたくさんいて、そこが英和の英和らしいところだと思います。今年度もクリスマスの飾り付け、そして後片付けをしてくれる学生たち、クリスマス礼拝の時、点火係として、前日から熱心に練習をしてくれたベトナムの留学生達……私はハラハラしていたのですが、しっかり自分の責任を果たしてくれたISEDA劇団の劇団員たち……その他の学生達も色々と手伝ってくれて……クリスマス行事をもりあげてくれました。行事を通じて、色々な学びをしているように思います……。」

---

(3) 柴田学長は日本キリスト教団静岡教会の教会員。

(4) 2012年までは毎年、クリスマス礼拝には器楽の演奏者とか、声楽家などに来ていただいていたが、クリスマス礼拝を英和大学の学生達によるもので、アットホームで礼拝に参加している者が皆、優しい気持ちになるクリスマスを祝うことができないか、そして英和大学のクリスマスが学生達の心に残るものにならないかと考えて、ISEDA劇団を立ち上げた。劇はクリスマス礼拝の後、行っている。ISEDA劇団のメンバーは毎年、変わるが、しかし、学生達は授業の空いている時間に和気藹々とまた、真剣に練習をしてくれている。作品は降誕劇ではないが、クリスマスにふさわしい愛がこめられた作品を劇にしている。ちなみに2016年度は「ME AND MY GIRL － ISEDA劇団版」であった。

柴田敏学長

「それは、アクティブ・ラーニングも兼ねているかもしれません……。建学の理念も行事を通じて……体に入ってくる……ようになっているように思われます。」

伊勢田

「学長から、これからの大学へ、そして学生への、メッセージをお願いします。」

柴田学長

「現代という時代は不安で落ち着かない時代ですから、その中にあって学生たちには、「出会い」、それは教員であったり、先輩後輩であったり、友達であったり、……そういう出会いを大事にしつつ、人生における指針を一人一人がもって生きていってもらいたいですね。大学というところは、もちろん、「学ぶ」ところではありますが、しかし、勉強だけでなく、「感じることが出来る」人間を育てていくところだと思います。」

伊勢田

「本日は、色々と学長から貴重なお話を伺うことができまして、本当にありがとうございました。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

インタビューを終えて

たくさんの重責を担われて、柴田学長のこの一年は大変だったことと思います。本当にありがとうございました。学長のこれまでのお働きの上に、神様の祝福が豊かにありますように祈ります。インタビューでは、学長が静岡英和学院大学に来られる前は、まったく、キリスト教と無縁だったと伺って、本当に驚き、そして神様のなさる御業のすばらしさに感動いたしました。これからも水曜日の 10 時半からの礼拝は、堅守し、あなたに喜ばれる恵みの中にある静岡英和学院大学の礼拝を守っていけますようにと心から思いました。

（伊勢田）

	２０１６年度　　チャペルとキリスト教行事
3 月	卒業礼拝：武藤元昭学長「主に望みをおく人」(15 日 10 時半～) 教職員全体会：武藤元昭学長「建学の精神の行方」(同日 13 時～ 14 時半) W303
4 月	礼拝（毎週水曜日） 始業礼拝・柴田敏学長「主の愛を信じて進もう」(5 日) イースター礼拝：伊勢田奈緒「ジャンプ！」(13 日) スチューデントリトリート（天城山荘一泊､伊豆三津シーパラダイス）（大学17～18日／短大16～17日） 山田美代子先生「地上と天上をつなぐ祈り」(20 日) 伊勢田奈緒「覆いが取り除かれている不思議なこと」(27 日)
5 月	柴田敏学長「自分と違うことを認める」(11 日) 学生礼拝：「リトリートをふりかえって」人間社会（飯塚晴也、定免亜理、MAY THET PE） コミ福（青木裕雅、杉本紗瑛）現コミ（ウエダ ｼﾞｮﾆｰ、永田ゆゆ）食物（小野映奈、氷川遙菜）(18 日) 崔瑛先生「愛について考える」(25 日)
6 月	伊勢田奈緒「心の安息の日」(1 日) 石田律代（同窓会会長)「行き先は素晴らしいところだから」(8 日) 柴田敏学長「主は生きて働いておられる」(15 日) 伊勢田奈緒「『べきださん』で生きるの？！」(22 日) 伊勢田奈緒「天上のキリストが言われる。『悔い改めよ！』と。」(29 日)
7 月	第 11 回楓コンサート開催（1，4，5，6，7 日） 「大学生となって三ヶ月」人間社会（栗田吏穂、豊田秋男、堀川千晶、山本大智、辺虎） 現コミ（SU NAIG TUNI, 深澤南）食物（杉村陽、鈴木七彩）(6 日) 伊勢田奈緒「伸ばしてくれる御手」(13 日) 柴田敏学長「神の愛が現れるために」(20 日)
8 月	
9 月	柴田敏学長「やがては大きな枝を張る」(28 日) 9 月卒業式（28 日）
10 月	中原陽三先生「永遠の命」(5 日) 伊勢田奈緒「友人に担がれて」(12 日) 金承子先生「人生の教訓」(19 日) 伊勢田奈緒「喜び、喜ばれるように」(26 日) 第 8 回クリスマスカードコンテスト（応募期間：1 ～ 31 日）
11 月	学生礼拝：「後期になって思うこと」人間社会（増田祥二郎、伊拉貴、西野雄蔵）コミ福（鈴木凌） 現コミ（青木穂花、鈴木杏菜）食物（佐野明日香、中澤茉莉）(2 日) 柴田敏学長「一人でも軽んじないように気をつけなさい」(9 日) 創立記念礼拝：柳川立行（三宝会代表） 奨励「恵みに活かされて」和太鼓演奏曲目（リトル･ドラマーボーイ、つっぱり、童夢、三宅太鼓）(16 日) 伊勢田奈緒「幸せは食卓の下に」(30 日) クリスマス・イルミネーション点灯（11 月 28 日～）
12 月	第１２回楓クリスマスコンサート開催（1，2，5，6，7 日） 伊勢田奈緒「心にしみ通る『幸いだ』という言葉」(7 日) 柴田敏学長「神がひとり子をくださる」(14 日) クリスマス礼拝・クリスマスメッセージ：伊勢田奈緒「イエスは光だから」 クリスマス劇「ME AND MY GIRL － ISEDA 劇団版』(五代目ＩＳＥＤＡ劇団【寺西穂華、坂本昇平他学生有志】(21 日) クリスマス・キャンドル・サービス＋クリスマス祝会（21 日午後 6 時～ W303 にて）
1 月	伊勢田奈緒「人は自分を知らない」(4 日) 伊勢田奈緒「知恵に生きる幸せ」(11 日) 柴田敏学長「出会いによって変えられていく」(18 日)

２０１５年度　静岡英和学院大学・短期大学部教職員研修会

―卒業礼拝講師　武藤元昭学長を囲んで―

大学開学以来、毎年、大学教育に携わっておられる先生を卒業礼拝講師にお招きし、午前に続く午後のひと時、教職員研修会を実施して参りましたが、今年度は、３月でご退職なさる武藤元昭学長に「『建学の精神』の行方」と題して、お話していただくことになりました。その後、先生を囲んで自由に討議したいと思います。
是非、ご出席頂きたく宜しくお願いします。

日時　２０１６年３月１５日（火）午後　１：００～２：３０

Ⅰ部　講師による発題　午後　１：００～２：００
Ⅱ部　自由討議　〃　２：００～２：３０

場所　Ｗ３０３教室

担当　伊勢田奈緒　宗教主任

2016年3月2日（水）

「建学の精神」の行方

キリスト教学校にとって目下大きな悩みとなっているのは、「建学の精神」の維持ということであろう。言うまでもなく、「建学の精神」の根本にはキリスト教信仰がある。しかし、現在のキリスト教学校に於いて、それがどこまで意識されているだろうか。

「建学の精神」は、私学の存立の基本である筈である。ただ、開学当初からの、時間の経過と規模の拡大が、それを忘れ勝ちにしてしまっているのが現状である。

キリスト校学校教育同盟の集まりで必ず話題になるのが、キリスト者教員の減少である。学長、校長にクリスチャンコードがある所がほとんどであるが、それが人選に大きな枷となっている。キリスト者教員も、教員募集の際に集まり難い。それを必須条件に出来ないからである。

それらに就いて、経験を踏まえて少しばかり考えてみたい。

平成 26 年 3 月 20 日改正

『キリスト教研究年報』執筆要綱

1　本誌は、静岡英和学院大学及び静岡英和学院大学短期大学部に在籍しているキリスト者教員（過去に在職していた者を含む。）の研究年報誌であり、該当教員の研究論文、研究ノート、その他キリスト教関連記事（チャペルなど）を掲載する。

2　編集委員会は、キリスト者教員である委員長及び教員若干名によって構成する。

3　委員長は、宗教主任とする。

4　原稿の掲載は、編集委員会の審議を経て決定する。

5　執筆者による校正は再校までとし、原則として大きな修正は認めない。

投稿要項

1　論文原稿は、未発表のものに限る。

2　原稿について

①原稿は、原則として横書きとし、電子媒体で提出する。

②「研究論文」は、1,600 字以内（注・図表等込み）の完全原稿とする。

③「研究ノート」は、12,000 字以内（注・図表等込み）とする。論文としての完成度は要求しないが、新たな方法論や視点を提供する内容であること。

④原稿は返却しないので、写しをとっておくこと。

⑤使用ソフトは、マイクロソフトワードとし、文字フォントは、原則として和文では明朝体、欧文では Century 体とする。

⑥原稿の文字の大きさ（ポイント）は、10.5 ポイントとする。

⑦原稿の用紙設定は、A4・縦置き・横書きとし、余白は、上 32mm、下 30mm、左右はともに 25mm とする。

⑧原稿の字数設定は、1 行半角 80 字（全角 40 字）、各ページ 40 行とする。

附則

この要項は平成 26 年 4 月 1 日から施行する。

編 集 後 記

『キリスト教研究年報』第五号を発行することが出来ましたことを嬉しく思います。今号のテーマは「キリスト教と学び」でした。

今号では、特に「礼拝を通しての学び」という題で、静岡英和学院大学における礼拝について考えてみることにしました。先ず、五名のクリスチャン教員による合作で礼拝についてのアンケートフォームを作成しました。そして、一年生全員（四学科）にそのアンケートに回答してもらいました。今回は一年生前期のみの結果ですが、次年度はこの調査を継続し、今年度のものと比較検討していこうと考えております。尚、今回は研究ノートとしています。

また、崔先生は世界遺産候補である長崎を訪ね、実際にキリシタンの遺産について調査し、それを『世界文化遺産候補「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産と観光受け入れ体制・観光商品化の現状　―長崎市と五島地域を中心に―』という論文にまとめられました。次に長年、宗教改革運動を研究してきました私は、宗教改革500周年という今年は格別な思いをもって、マルティン・ルターとブーゲンハーゲンのヨナ書について研究し、『宗教改革者ブーゲンハーゲンがヨナ書から学んだこと－ブーゲンハーゲンがマルティン・ルターの『ヨナ書』から学び、発展させた「ヨナ書」理解－』を執筆しました。

さて、今回は特に、2016年4月より本学の学長・院長になられた柴田敏先生、「柴田敏学長・院長の思い」と題して、インタビューをさせていただきました。貴重なお話を伺うことができましたが、その中でも、学長が建学の精神を具現化できる場所が礼拝であり、礼拝は本当に大切なものであると語られておられたことが印象的でした。さらに、柴田学長とキリスト教との出会いの場が大学のチャペルであったことをうかがい、驚き、また神様の御業の素晴らしいことを思い、感動しました。

静岡英和学院は今年130周年、短大は51周年、大学は15周年となりますが、これまでの歩みとそして、これからの歩みの上に、神様の祝福が豊かにありますようにと祈り筆をおきたいと思います。

尚、2016年3月15日に行われた教職員研修会の際、配布された武藤元昭前学長・院長のレジュメと2016年度の静岡英和学院大学における宗教活動報告を掲載しました。

最後に、『キリスト教年報』第五号に協力して頂いた本学教員、また篠原印刷株式会社の堀氏に心から感謝いたします。

宗教主任　伊勢田　奈　緒

キリスト教研究年報　第五号
Christianity Study Annual

２０１７年３月３１日印刷
２０１７年３月３１日発行

編　集　「キリスト教研究年報」編集委員会
発　行　静岡英和学院大学キリスト教研究会
静岡市駿河区池田１７６９番地
電話（０５４）２６１－９２０１
印刷所　株式会社　篠原印刷所
静岡市駿河区登呂６－７－５
電話（０５４）２８６－５１４１